

川村清雄氏揮毫油絵展覧会日誌 資料の翻刻と解説

落合則子*

目次

解説

明治三十二年個展の開催経緯

「油絵展覧会日誌」の内容

個展の招待者たち

展覧会の広報と反響

本文

キーワード 川村清雄 日本美術院 橋本雅邦

解説

本稿は、江戸東京博物館所蔵「川村清雄関係資料」のうち、明治三十二年に開催された川村清雄の個展の記録である「川村清雄氏揮毫油絵展覧会日誌」および関連資料の一部を翻刻するものである。

明治三十二年個展の開催経緯

まず、この個展が日本美術院で開催されるに至った経緯について、簡単に説明しておきたい。

川村清雄は、明治二十九年初頭に海軍省の委嘱による大作「黄海之戦実景」四枚の制作を終えたが、この時海軍省軍令部で小笠原長生が作画の監督にあたったことが縁となり、清雄は小笠原の庇護を受けるようになった。小笠原は清雄を代々幡の自邸の近くに住ませ、自邸で絵を描かせていた。清雄は、小笠原邸へ通うようになってから一年程たった頃、「貴賤図」の制作に取り組んだ。そのさなかに橋本雅邦が、岡倉天心とともに設立した日本美術院について相談のため小笠原邸を訪れた。雅邦は、邸内の一室で清雄が作画をする姿を目をとめ、その絵にただならぬものを感じ、清雄と画論を交わし意気投合した結果、展覧会の企画が実現したという^①。

清雄の個展は、明治三十二年二月二十七日から三月二十四日までの会期で、前年秋に建設された谷中の日本美術院において開催された。一方雅邦の個展は、清雄の個展に呼応する形で川越画宝会の主催により三月十一日から十七日まで上野公園の梅川楼で行われた。この両展は、日本における初の個展といわれている。

今回の個展の実現にあたっては、橋本雅邦の周旋もさることながら、小笠原長生の尽力が大きかった。展覧会日誌には、小笠原が開会前から会場に駆けつけ会期中も何度か足を運んで監督をする姿を記している。また小笠原と並んで展覧会の世話をした者として、曾根鍵次（鍵治とも

* 東京都江戸東京博物館学芸員

表記」という人物が日誌中にたびたび登場する。彼は、建築家として著名な曾根達蔵の弟である。曾根家は唐津藩士で、父政父^{まさちち}は唐津藩留守役を務め、長生の父長行（唐津藩世子・老中）の厚い信任を受けた。長生の出生時には、曾根家が一時養育の任にあたった。^②長男達蔵は長行の小姓として仕え、戊辰戦争で長行が東北の地に走った時、会津まで主君に随伴したという。^③その弟鍵次は、長生の書生頭として同家に住み込み仕えていた。

「油絵展覧会日誌」の内容

本稿が紹介する展覧会日誌は、一冊の横帳で、寸法縦二二・八cm×横三三・七cm、全四七丁からなる【写真1】①～④以下、写真・表は解説文の後に一括してまとめた。内容と筆跡からみて、清雄自身の筆ではない。日誌中に登場する門人には、吉益耳童・水野義一・亀山凌雪・滝田喜三・滝田（老）・金子家敬・古坂の名が見え、彼らが交替で記したものと思われる。日誌は、展覧会のオープンを前にした二月二十五日から終了後の三月二十六日までの期間を記録し、出展作品や来観者の顔ぶれ、広報活動や会場での宿直者など、展覧会運営の詳細を綴る。当初展覧会の会期は三月二十五日から始まる予定だったが、準備が間に合わず^④、二十七日に延期されたこと、また終了日も当初三月十二日であったが、結局二十四日まで延長されたことが、日誌の記事より知られる。また日誌後半の余白には、個展を取材した諸新聞の切り抜き記事がスクラップされている【写真1】⑤。他に、狩野派の画家で観覧に訪れた「狩野久信」の名刺が貼付され、「招待通券」一枚が挟み込まれている【写真1】⑥～⑧。

さて、本稿にて紹介する資料の意義は、これによって川村清雄の個展の具体的な全容が明らかになることである。

【表1】に、展覧会での出品作を日誌の記事から拾い出し、出品日の順

に整理した。日誌からは、準備期間だけでなく展覧会のオープン後も、諸方の所蔵者から作品が断続的に集荷され、どの作品がいつ出品されたかをこの日誌で知ることができる。その総数は全一〇五点にのぼる。ただし日誌が記す数字と若干の相違があり、例えば日誌では三月十八日時点での陳列品を九六枚としているが、【表1】ではすでに一〇〇点を超えている。集荷した作品の中には売品が含まれていたりするため、この点についてはなお精査を必要とする。この中で現存する作品は、1《龍》（勝家旧蔵 福富太郎コレクション所蔵）・4《貴賤》（小笠原家旧蔵 唐津市所蔵）・5《黄海々戦》（小笠原家旧蔵 福富太郎コレクション所蔵）・29《二ツ鳥》（杉山令吉旧蔵 笠間日動美術館所蔵）・57《海底ノ頭蓋骨》（木村浩吉旧蔵 静岡県立美術館所蔵）・66《泰西ノ少女》（大蔵省印刷局旧蔵 東京国立博物館所蔵）・92《桜狩》（個人蔵）・94《肖像》（本間さだ像か個人蔵）・105《かたみの直垂》（東京国立博物館所蔵）と比定される。

出展作品がすべて揃ったのは、会期終了も近い三月二十一日であった。その最後に登場した作品が、この年一月十九日に死去した勝海舟の鎮魂のために描いた《形見の直垂》である。それも「未成」の状態で出展された。橋本雅邦が清雄と出会う個展の企画話が持ち上がったのは、海舟が没する前の明治三十一年中のことと推測されるが、海舟の死に接し清雄はただちに《形見の直垂》の制作に取りかかったと思われる。当館所蔵「川村清雄関係資料」中に清雄に宛てた小笠原長生書簡があるが、会期中「絵学校」（日本美術院をさすか）で揮毫をしようとする清雄に、そこでは落ち着かないだろうから自邸に戻るよう勧めている。^⑤何としても会期中にこの作品を出陳して海舟の霊に捧げようとする清雄の思いを感じることができ

る。展覧会に出品された作品の所蔵者は、勝家や小笠原家などの華族のほか、外山正一・松本常磐・倉地寛裕といった川村家の親族、および軍関係者、実業界、新聞出版関係者が目立つ。その中で特徴的なのは、清雄がイタリヤ留学中に雇用され帰朝後一年弱の間在職した大蔵省印刷局の技

師たちの名前である。斎藤知三(《校草》を出品)・植原陳政(《雪中鹿》を出品)・本多忠保(《山水》を出品)・鴨下友次郎(《バラ》《水辺ノ柳景》を出品)・細貝為次郎(《春日ノ景》を出品)・木戸小太郎(《海岸景》を出品)・下村孝光(《梅二犬ハルコ》を出品)は、いずれも印刷局に勤務していた人々であり、清雄がキヨッソーネとの対立が原因で印刷局を離れてからも彼等との間には交流が続いていたことを物語る。印刷局で清雄をめぐる騒動が起きた時、局内の若い技師の多くが清雄を支持したという。⁶ 彼等が清雄の作品を所持していたことは、その証左となろう。この個展の翌年、印刷局出身の技術者たちによって凸版印刷合資会社が設立され、清雄は同社が最初に発行した明治三十四年カレンダーのデザインを担当した。⁷ なお、展覧会には印刷局からも九点が出品されている。⁸

また日誌からは、観覧に訪れた人々の顔ぶれを知ることができる。その中で注目されるのは、外国人の観覧である。後に紹介する「招待状認済扣」には、招待状の送り先として米英仏伊をはじめとする各国公使館が挙げられている。今回の個展で清雄は、留学中から研究してきた独自の芸術世界を初めて世界に問おうとしたのである。ヴェネツィアで友人のスペイン人画家リーコが清雄に与えた「貴方がたの持っている日本の趣味を失わないように」⁹との教えに対する一つの答えを、清雄は初の個展で示そうとしたのである。日誌中にみえる外国人として特筆すべきは、三月三日に栗塚省吾の案内で訪れたフランス人画家フェリックス・レガメである。レガメは、日本の美術教育に関する視察のためこの年二度目の来日をしていた。彼の日本到着は明治三十二年一月で、約三ヶ月間日本に滞在した。¹⁰ 栗塚は仏留学の経験がある司法官で、レガメとは留学時代の旧友であった。¹¹ レガメは、清雄の展示を観覧して種々の批評をしたことが日誌にみえるが、その内容は残念ながら知ることができない。レガメが来観した時清雄はいにく不在であったが、その後十日に清雄は栗塚を訪問していることが日誌にみえ、ここでレガメに会った可能性があ

る。のちに石井柏亭が、清雄の個展を観覧に訪れた時に、清雄がレガメについて批評しているのを聞いたと語っている。¹² なおレガメは、帰国後に著した『日本』において、橋本雅邦の個展を観覧し清雄の展覧会にも出かける旨を記している。¹³ また、レガメの他にも数人の外国人が展覧会を訪れ、三月十一日にドイツ人画家アドルフ・フィセルが展覧会に感激し清雄の作品を欧米諸国に紹介するため写真を撮っていったことが記される。

ところで、フィセルが熱心に写真撮影をしていたその場に、「本願寺新法主御令弟」と家扶ら一行が訪れた。本願寺新法主とは、東本願寺第二十三代法主大谷光演(彰如)のことである。光演は、俳壇で活躍し世に「句仏上人」と呼ばれた文化人として知られ、竹内栖鳳等に師事して日本画もよくした。日誌の記述では法主当人は来なかったようであるが、東本願寺の来観を実現させたのは、杉山令吉(号三郊)の尽力によるものであったことが記事によって明らかになる。杉山は、書家で清雄の支援者の一人であり、光演に書道を指導していた。この時一行は、フィセルが会場の庭に持ち出して撮影していた《梅に雀》の大額を買い上げた。なお東本願寺と清雄の関わりについては一つの逸話があり、明治三十年代中頃に清雄が東本願寺から光演の肖像を受注したがなかなか落成せず、結局未完に終わってしまったという。¹⁴ ともあれ、この個展が東本願寺と清雄を結びつける契機となったことは確かである。

なお、この個展には全部で一二枚からなる展覧会場スケッチがあり、本稿にて全点を写真掲載する(写真2)①~⑫。日誌中の三月二十五日条に、陳列室の「実写縮図」を吉益耳童が担当したとの記述があり、これらは吉益の筆によるものであることが判明する。このスケッチについては、丹尾安典氏がすでに一部について詳細な紹介をされているので参照されたい。¹⁵

個展の招待者たち

さて、もう一つ本展覧会に関連する資料として「招待状認済扣」を合わせて掲載する。本資料は、寸法縦一二・八cm×横三二・六cm、全六丁からなる横帳である（写真3）。表題が「認済」とあることから、展覧会の招待状を書き終えた送りを記したものと考えられ、二一五件（うち一件は重複、一件は削除）にのぼる個人および機関の名がリストアップされている。年紀の記載がないが、内容からみて明治三十二年個展の招待者のリストであると断定して差し支えないであろう。

【表2】に「招待状認済扣」に見える招待者を、大雑把ではあるが分野別に整理した。まず、招待者のうち美術関係をみると、多くが日本美術院の関係者で占められていることが分かる。今回の個展実現のきっかけを作った橋本雅邦はもちろん、川崎千虎・小堀鞆音師弟や金工の教授桜井正次の名がある。フェノロサは明治二十三年にアメリカへ帰国しているが、同二十九年から再来日していた。他に日本画家として、尾形月耕・松本楓湖・小林習古、また野口小籟や跡見玉枝といった女流画家の名もある。一方、洋画関係者をみると、清雄の門弟である東城鉦太郎・塚原律子以外には黒田清輝一人の名があるのみである。ただしこの招待者リストが個展の全招待者とは断言できず、リストに載っていない五姓田芳柳の名が日誌に招待者として記され（三月四日条）、三月三日には明治美術会から名簿を取り寄せたとの記事もある。また、会期中に松岡寿（三月十八日条）が訪れ、浅井忠や石川欽一郎らが中心になって活動していた「自来集」のメンバーが観覧していること（三月五日条）が、展覧会日誌から知ることができる。

先述のとおり、清雄の個展の実現にあたっては、橋本雅邦の周旋と日本美術院のバックアップがあった。小笠原長生も同院の有力な支援者の一人である。周知のとおり、日本美術院の設立の経緯は、この前年に起

きたいわゆる「美校騒動」に端を発する。この騒動で岡倉天心に従い東京美術学校を辞した教員とその関係者が中心となって、日本美術院を創立した。一連の紛争に清雄自身は関わるべくもなく、雅邦も小笠原邸で会うまでは川村清雄という画家の存在を知らなかったようである。そのような関係の中で、突如として実現した清雄の個展開催はあまりに唐突である。美術学校を挟み撃ちにするかのように上野公園と谷中で開催された二つの個展は、美術界の紛争の渦中で日本美術院が美術学校に対して仕掛けた挑戦的な企画であり、岡倉天心らが去った後に西洋画科の黒田清輝が残った美術学校に対するアンチテーゼとして川村清雄が担ぎ出されたような感さえ受ける。清雄が洋画界において不遇の身となった原因に東京画壇の権力抗争に巻き込まれたことが挙げられているが、その一端が明治三十二年の個展に現れているように思える。

続いて陸海軍関係についてみると、海軍では出品者の木村浩吉と中村松太郎の他、西郷従道・沢鑑之丞・山本権兵衛・伊藤雋吉・榎本武揚・樺山資紀の名がみえる。そして陸軍では出品者である森林太郎（隼外）の他、陸軍大臣桂太郎や野津道貫・久我通久といった陸軍軍人、保利真直・石黒忠恵・賀古鶴所の名がある。保利以下の三人はいずれも軍医であり、これは隼外の紹介によるものであることが推測される。

次に政財界・官界・学界関係では、先に触れた栗塚宣吉ほか官僚の面々、星亨や高橋是清などの政治家、矢田部良吉や箕作佳吉、菊池大麓など帝国大学の学者たち、また実業界については、岩崎・三井を初めとして原六郎・浅野総一郎・森村市左衛門などそうそうたる財閥たちの名前が連なり、益田孝以下三井物産関係者の面々の名もある。なお、高橋是清は曾根達蔵の妹がその夫人である。これらの人々は、清雄自身の留学人脈も関係していると思われるが、他にも清雄の義兄江原素六の政治家人脈が与って力あり、また帝大の総長を務めた外山正一および成瀬隆蔵や松本常磐など、官学界および政財界で活躍した川村家の親族の周旋による

ものであろう。変わったところでは、「天狗煙草」の創業者岩谷松平の名が見える。岩谷は、「天狗煙草」のパッケージ印刷の発注で凸版印刷合資会社創業のきっかけを作った人物である⁽¹⁸⁾。

実業界とも関連して注目しておきたいのは、演劇関係の人物である。

明治十年代後半に演劇改良運動が起こり、同十九年に演劇改良会が発足した。この運動は短期で衰えたが、演劇界の近代化に影響を与え、歌舞伎座の創設もその流れの上で実現された。個展の招待者には、福地桜痴や依田百川など運動の急先鋒となり歌舞伎座建設に尽力した人々や、のちに株式会社化した歌舞伎座の役員の名が見える。清雄が演劇界とのつながりを持ったきっかけは、彼の親友であった長田秋濤と和田垣謙三を通じてのことと思われる。和田垣と出会った時期について、清雄は明治二十七年のことと証言するが、この年、歌舞伎座で上演された福地の作「互の疑惑」を、和田垣が英語、長田が仏語に翻訳した⁽¹⁹⁾。なお、小笠原長生も演劇界との関係が深く、「金波楼主人」の筆名をもって浄瑠璃脚本を書き、そのいくつかが上演されている⁽²¹⁾。

華族・旧大名家および旧幕臣関係では、清雄の主君徳川家達と徳川慶喜はもちろん、一条家・三条家の旧公卿、浅野・鍋島・酒井・蜂須賀などの名が見える。なお岩倉具定は、清雄が明治三年アメリカへ旅立った時の留学仲間である。また、清雄がアメリカ留学中ランマンのもとで一時生活をともにした津田梅子とその父仙の名も見える。

展覧会の広報と反響

最後に、資料を通して知ることができる、当時の展覧会の広報戦略の実際とその反響について言及して締めくくりとしたい。展覧会にさいして主催者は、新聞各紙の記者に対し招待状を送り、取材をしてもらうよう働きかけた。招待者リストには、「都新聞」主筆宮川鉄次郎や新聞「日本」の陸羯南、雑誌「太陽」の編集主幹であった高山樗牛など、当時の

言論界をリードしていたジャーナリストの名が並ぶ。また、神田パノラマ館への広告（三月四日条）や、招待券付の「広告紙」（ポスターか）の配布（三月十一日条）などの広報活動をおこなった。

新聞を中心とするメディアへの宣伝が功を奏し、新聞各紙は連載で清雄の個展の様子を詳しく紹介し批評を加えた。本邦初の洋画個展に対する世間の関心の高さがうかがえる。展覧会日誌には、そのうち「国民新聞」「都新聞」「毎日新聞」「時事新報」「日本」の記事がスクラップされている。「国民新聞」は、生前の勝海舟がしばしば時事に関する談話を掲載したこともあり、清雄の芸術に対して概ね賞賛する論評を行っている。しかし「時事新報」は高い評価をする一方でかなり辛口のコメントも寄せ、「毎日新聞」にいたっては展覧会の鑑賞が無駄足だったといわんばかりの酷評をしている。ともあれいずれの論評も、その基調は日本の美術界においてすでに確立しつつあった「純正美術」としての洋画の概念規定を基準に川村清雄の作品を論じ、その評価が「是真的油絵、似而光琳的装飾画、俳画的作品」（毎日新聞）であり「これ畢竟接合せなり、鶴なり」（時事新報）というものであった。自信をもって個展に打って出たはずの清雄にとって、世間の厳しい評価は精神的に強いダメージを与えた。この後清雄は小笠原のもとを去り、角筈の寓居で苦悩の時期を過ごしたのであった。

明治三十二年の川村清雄の個展は、ほとんどの作品が貴顕の家に秘蔵されていた彼の画業を一堂に公開した初の機会であり、その反響は大きかった。清雄は洋画壇で異端視されやがて表舞台から姿を消したが、世間はその行動をしばしば興味をもって見守り続けた。画壇から離れた後も、清雄は小説の題材になり、彼を知る人がその人物と作品を語り、新聞雑誌に時折その消息が報じられた。

ところで、橋本雅邦の明治三十二年以後の作品に、ダイナミックな瀑布を描いたものがみられる⁽²²⁾。一方清雄も、得意とする画題の一つに滝の

図があり、個展では小笠原家が所蔵する大作を出陳した。これらには、相互に影響しあう要素を感じることはできないだろうか。美術界が再編と新たな展開をみた明治三十年台とその前後の時代に、川村清雄の個展の意義について考える一助として、本資料が活用されれば幸いである。

〈付記〉 曾根家と小笠原長生との関係については、唐津市近代図書館よりご教示をいただいた。末筆ながらここに謝意を表する。

【註】

- (1) 小笠原長生「洋画の天才川村清雄翁の逸話」(書道第二二卷二二号 昭和九年)
- (2) 『小笠原長生と其随筆』(一九五六年 創造社)。なお、江戸東京博物館所蔵「川村清雄関係資料」中には、曾根政父の肖像写真が六枚所蔵され、そのうち二枚には、肖像画制作のための方眼線が引かれている。清雄は鍵次から作画を依頼されたものとみられる。
- (3) 石田潤一郎『日本の建築 明治大正昭和』第七巻 ブルジョワジーの装飾 (一九八〇年 三省堂)
- (4) 当館所蔵資料中に、宮川鉄次郎に宛てた油絵展覧会の招待状がある(資料番号01002196)。文面は以下のとおり。
 拝啓、余寒未だ酷敷御座候処、益御清穆大慶至極に奉存候、陳は本月廿七(注…「五」を修正)より来る三月十二日迄谷中初音町日本美術院にて洋画家川村清雄氏揮毫の油絵展覧会相開候間、何卒御家族様方御同伴御来観の程奉希上候、以上
 明治三十二年二月 日 油絵展覧会發起人敬白(「油絵展覧会印」)
 宮川鉄次郎殿
 追て御来観の節は必ず此券御持参願上候
- (5) 川村清雄宛小笠原長生書簡(03001253)。釈文は次の通り。
 拝啓、陳は展覧会開会中は絵学校ニ而御揮毫之御積りニ候由之処、同所は来館人等有之自然御認方呆取^{はかどり}取申間敷存候間、御帰宅之上御揮毫被成候方可然旨存候、至急御歸り之程待入候、早々敬具
 三月十二日 小笠原長生

川村清雄殿

- (6) 大蔵省印刷局編『大蔵省印刷局百年史』第二卷(一九七二年)および「悲惨なる画家の半生」(「趣味」第一卷第五号所収 明治三十九年)
 - (7) 丹尾安典「キヨッソーネの拒絶―川村清雄との関係をめぐって―」(明治美術学会他編『お雇い外国人キヨッソーネ研究』所収 一九九九年 中央公論美術出版)
 - (8) 印刷局が所蔵していた清雄の作品は、石井柏亭「川村さんと私」(中央美術第五卷一号所収 大正八年)等によって内容が知られている。
 - (9) 高階秀爾「川村清雄について二、三の考察」(高階秀爾・三輪英夫編『川村清雄研究』(一九九四年 中央公論美術出版 所収) 二二頁)
 - (10) 『ギメ東京日光散策・レガメ日本素描紀行』(新異国叢書第Ⅱ輯八 一九八三年 雄松堂出版) 二九三頁解説
 - (11) 註(10) 同書二七五頁
 - (12) 石井柏亭「川村さんと私」(中央美術 第五卷第一号 大正八年)。証言は次のとおり。「フェリックス・レガメ」と云ふ仏蘭西画家が恰度日本に来て居たので、其人の話も出た。「此処の大観と云ふ人の絵のやうに形を一向構はないのですから」と川村さんがレガメのことを評して居られるのを、私は小耳にはさんだのでした。」
 - (13) レガメ『JAPON』第三巻のうち、Artistes d'aujourd'hui et d'autrefois (過去と現在の芸術家たち)の章。内容は次のとおりである。
 美術協会主催の絵画の展覧会が、上野公園で開催されている。昨日は、橋本雅邦展であった。雅邦は、一八九九年に亡くなったが、上野美術学校の教師で、画家たちからも最も評価されていた画家である。七三年間の全生涯の作品を展示しているものであった。明日からは、イタリアから帰ってきた、若い川村(M.Kawamura)の、同時代の人々を驚かし、また、仲間の新進の画家たちの賞賛を受けるような展覧会が開催されるであろう。ヴェニスやその周辺で描かれた油画の習作は、真に現代的なものであり、先駆的な展覧会となるであろう。(「フェリックス・レガメ―日本関連著作集成」(二〇一〇年) 二九三頁。翻訳は当館学芸員行吉正一による)
- 橋本雅邦を故人と知っていることや、すでに開会している川村清雄の展覧会をこれから始まると思っているところなどに誤解があるが、レガメは橋本雅邦の展覧会にも足を運んだことが確認される。なお同書には、川村清雄作「黄

海之戦実景其ノ二」の図版が掲載されている。

- (14) 木村駿吉『川村清雄 作品と其人物』（大正十五年 私家版）第十九悪評および第三十七審査官より転落。
- (15) 丹尾安典「時童拾遺記」（静岡県立美術館『川村清雄展』図録所収 一九九四年）
- (16) 石井柏亭『柏亭自伝』（一九七一年 中央公論美術出版）七八頁「このころは浅井、高橋（源吉）、渡部（鋏太郎）、石川等と「自来集」なる小団を結んで研究の熱を生じていた。」
- (17) 佐藤道信『明治国家と近代美術―美の政治学―』（一九九九年 吉川弘文館）六六～六七頁
- (18) 『凸版印刷株式会社史』（一九八五年）三二～四五頁
- (19) 大町桂月編『和田垣博士傑作集』所収「書酒の交際」（大正十年 至誠堂）
- (20) 註（19）同書所収「和田垣博士年表」および『歌舞伎座百年史』本文篇上巻（一九九三年 松竹株式会社）八五頁
- (21) 註（2）に同じ
- (22) 山種美術館「橋本雅邦―その人と芸術―」展図録（一九九〇年）

【第1表】 明治32年川村清雄油絵展覧会出品作

* 出品の展示室は記事により違うため、下記資料を併記した
 (ス)：展覧会スケッチ
 (国)：国民新聞
 (ほ)：ほと、ぎす 第2巻第6号

| | 受取または 出品日 | 作品名 (配列は日誌の記載順) | 形 態 | 所蔵者 | 所蔵者備考 | 展示室 |
|----|--------------|--------------------|--------|---------|--------------------------------|----------------------------|
| 1 | 2月25日 | 龍 | | 勝伯 | 華族（伯爵） | (国) 第一室 (毎) 第四室 (ほ) 第三室 |
| 2 | 2月25日 | 夕浪 | | | | (国) 第二室 |
| 3 | 2月25日 | トウモロコシ | 聯 | | | (国) 第三室 |
| 4 | 2月25日 | 貴賤 | | 小笠原家 | 華族（子爵）丁は長生の弟 | (ス)「福島少将像」と同室 |
| 5 | 2月25日 | 黄海々戦 | | | | (ス) 第一室 |
| 6 | 2月25日 | 薔薇ニ鳩 | | | | (国)(ス) 第一室 |
| 7 | 2月25日 | 滝 | | | | |
| 8 | 2月25日 | 牡丹 | 黒塗板 | 近衛家 | 華族（公爵） | |
| 9 | 2月25日 | 秋草 | 黒塗板 | 田安家 | 華族（伯爵） | (ほ) 第一室 |
| 10 | 2月25日 | 龍 | | 曾根鍵次 | 小笠原家書生 | |
| 11 | 2月25日 | 蝸牛ニ秋草 | | | | |
| 12 | 2月25日 | 秋草 | 神代杉板 | 川田豊吉 | 実業家 | (国) 第一室 |
| 13 | 2月25日 | 宝来山 | | 山本淑儀 | 旧幕臣 海軍軍人 | |
| 14 | 2月25日 | 桜草 | 杉板 | 斎藤知三 | 印刷局 | |
| 15 | 2月25日 | 紅葉雀 | 黒塗板 | 戸田次郎 | | |
| 16 | 2月25日 | 猫ニ鈴 | | 原氏 | 招待者に原六郎の名あり 原富太郎（三溪）の可能性もあり | |
| 17 | 2月25日 | アズマヤ | 黒塗板 | | | |
| 18 | 2月25日 | 月ニ秋草 | 小形神代杉板 | | | |
| 19 | 2月25日 | 岸打浪 | | | | |
| 20 | 2月25日 | 難船 | | 中村松太郎 | 海軍軍人 | (ス) 第二室 |
| 21 | 2月25日 | 桜狩 | 神代杉板 | 巖谷季雄 | 小波・澁山人 作家 | |
| 22 | 2月25日 | 浪ニ千鳥 | 円額 | 横井時冬 | 歴史学者 東京高等商業学校 | (ス) 第二室 |
| 23 | 2月25日 | バラ | 赤杉板 | 苗村又右衛門 | 実業家 歌舞伎座社長 | |
| 24 | 2月25日 | 仏像 | 古木 | 勝伯 | | (ス) 第二室 |
| 25 | 2月25日 | 雪中鹿 | | 榎原陳政 | 印刷局 | |
| 26 | 2月25日 | 山水 | | 本多忠保 | 印刷局 | |
| 27 | 2月25日 | 洋風山水 | | (富田鉄之助) | 銀行家 勝海舟門下 | (ス) 第一室 |
| 28 | 2月25日 | 美男カジラ瓦 | 梅門神代杉板 | 大田万吉 | 出版者 | (ス) 第一室 |
| 29 | 2月25日 | ニワ鳥 | 神代杉板 | 杉山令吉 | 三郊 書家 | (国) 第一室 |
| 30 | 2月25日 | 梅花 | 神代杉板 | 保利真直 | 陸軍軍医 | (国) 第一室 |
| 31 | 2月25日 | ボケニ豆花 | 絹地 | 杉山令吉 | | |
| 32 | 2月25日 | ベニス景色 | | 曾根鍵次 | | (ほ) 第一室 |
| 33 | 2月25日 | 浜林の山水 | | 向山愼吉 | 旧幕臣 海軍軍人 | |
| 34 | 2月25日 | 滝に鳥 | | 筒井年峯 | 画家 | |
| 35 | 2月25日 | 山水 | ガラス？ | 木村浩吉 | 旧幕臣 海軍軍人 | |
| 36 | 2月25日 | バラ | 洋皿 | 鴨下友次郎 | 印刷局 | |
| 37 | 2月25日 | 鷺 | | 小笠原伯爵 | 華族伯爵 | (国)(ス) 第四室 |
| 38 | 2月25日 | 猿 | | | | |
| 39 | 2月25日 | 福島海軍少将像 | | 海軍水交社 | | (国) 第一室 (毎)(ほ) 第三室 |
| 40 | 2月25日 | 墨堤朝景 | | 宮川鉄次郎 | 都新聞主筆 | |
| 41 | 2月25日 | 柳景色 | | 五姓田芳柳 | 洋画家 明治美術会 | |
| 42 | 2月25日 | 春日ノ景 | | 細貝為次郎 | 印刷局 | |
| 43 | 2月25日 | 海岸景 | | 木戸小太郎 | 印刷局 | |
| 44 | 2月25日 | 梅ニ犬ハルコ | | 下村孝光 | 印刷局 | |
| 45 | 2月25日 | 水辺ノ柳景 | | 鴨下友次郎 | 印刷局 | |
| 46 | 2月25日 | 柳に鳩 | | | | |
| 47 | 2月25日 | ベニス景色 | 小形 | | | |
| 48 | 2月25日 | 晩秋ノ景 | | | | |
| 49 | 2月25日 | 花壳 | 杉板柱掛 | | | |

| | 受取または 出品日 | 作品名 (配列は日誌の記載順) | 形 態 | 所蔵者 | 所蔵者備考 | 展示室 |
|-----|--------------|--------------------|------|-------|--------------------|---------|
| 50 | 2月25日 | ベニース景色 | 中形 | | | |
| 51 | 2月25日 | 梅二色紙 | 赤杉板 | 苗村半次 | | |
| 52 | 2月26日 | 頼朝ノ石橋山 | | 小松宮家 | 皇族 | (ほ) 第三室 |
| 53 | 2月26日 | 童子肖像 | | 栗塚省吾 | 官僚 司法官 | |
| 54 | 2月26日 | 草刈女ノ山水 | | | | |
| 55 | 2月26日 | 小形猿 | | 小林習古 | 画家 | |
| 56 | 2月26日 | 死犬 | | 伊原敏郎 | 青々園 劇作家 | (ス) 第二室 |
| 57 | 2月26日 | 海底ノ頭蓋骨 | | 木村浩吉 | 旧幕臣 海軍軍人 | |
| 58 | 2月26日 | 洋風ノ装飾 | | 森林太郎 | 鷗外 陸軍軍医 | (ほ) 第二室 |
| 59 | 2月26日 | 柘榴 | | 小島氏 | 招待者に小島泰次郎・小島憲之の名あり | |
| 60 | 2月26日 | 柳沼 | | 塚本 | | |
| 61 | 2月26日 | 溪谷景 | | | | |
| 62 | 2月26日 | 柳景色 | | 平木氏 | | |
| 63 | 2月27日 | 四谷津ノ守ノ景 | | 印刷局 | | |
| 64 | 2月27日 | 西洋ノ装飾 | | | | |
| 65 | 2月27日 | 西洋装飾 | | | | (ス) 第四室 |
| 66 | 2月27日 | 泰西ノ小女 | | | | |
| 67 | 2月27日 | 海岸景 | | | | |
| 68 | 2月27日 | 海岸畑ノ景 | | | | |
| 69 | 2月27日 | 田舎ニ稲荷ノ鳥居 | | | | |
| 70 | 2月27日 | 神社ニ鳩 | | | | |
| 71 | 2月27日 | 僻村ノ景色 | | | | |
| 72 | 2月28日 | 寒牡丹 | 黒塗板 | 春陽堂 | 出版社 | |
| 73 | 2月28日 | 貝桶 | 神代杉 | | | |
| 74 | 2月28日 | 仏御前(新小説原図) | | | | |
| 75 | 2月28日 | 乱レ箱ニフクサ | | | | |
| 76 | 2月28日 | 水辺ニ夏草 | | | | (ほ) 第二室 |
| 77 | 2月28日 | 景色ニ小鳥一羽あり | | | | |
| 78 | 2月28日 | 柳ノ景色 | | | | |
| 79 | 2月28日 | 子犬ノ図 | 皿 | 西郷従道 | 華族(侯爵) 夫人は得能良介の長女 | |
| 80 | 2月28日 | カンムリ | 扇面 | 杉山令吉 | | (ス) 第二室 |
| 81 | 2月28日 | 瓦ニなでしこ | 聯 | | | |
| 82 | 3月2日 | 鶉の図 | 黒塗板 | 賀古鶴所 | 陸軍軍医 | |
| 83 | 3月3日 | 海岸の景色 | | 高山林次郎 | 樗牛「太陽」編集主幹 | |
| 84 | 3月5日 | 浅草土産 | | 栗塚省吾 | | |
| 85 | 3月5日 | 銀地扇形寒牡丹 | 扇面 | | | (ス) 第二室 |
| 86 | 3月5日 | 丸盆 | 盆 | 神田乃武 | 英語学者 東京高等商業学校 | (ス) 第二室 |
| 87 | 3月5日 | 丸盆 | 盆 | | | (ス) 第二室 |
| 88 | 3月5日 | 鶏の図 | | 松平齊 | 華族(男爵) | |
| 89 | 3月5日 | 泰西婦人の肖像 | | 外山正一 | 川村家親族 帝国大学総長 | |
| 90 | 3月9日 | 鸚鵡の図 | | 金清楼 | 神田の料亭 | |
| 91 | 3月9日 | 梅に雀 | 大額 | | | |
| 92 | 3月11日 | 桜狩 | | 福井つる | 福井菊三郎家 川村家親族 実業家 | (ス) 第二室 |
| 93 | 3月11日 | かささぎ | | 高塚氏 | | |
| 94 | 3月12日 | 肖像 | | 本間清雄 | 外交官 | |
| 95 | 3月12日 | (春陽堂の画) | | | | |
| 96 | 3月13日 | 五緒車ノ図 | | 松本常磐 | 川村家親族 実業家 | |
| 97 | 3月13日 | 桜花ニ旧鈴ノ図 | | | | |
| 98 | 3月14日 | 景色の画 | | | | |
| 99 | 3月15日 | 牡丹 | | 安田善次郎 | 実業家 | |
| 100 | 3月18日 | 牡丹図 | | 本宿恒子 | 本宿宅命息女 | |
| 101 | 3月18日 | 丸板色紙 | 丸板色紙 | | | (ス) 第二室 |
| 102 | 3月18日 | 菜花ニ綿の木の図 | 塗板 | | | |
| 103 | 3月19日 | 小引戸 | 小引戸 | 倉地寛裕 | 川村家親族 旧幕臣 | (ス) 第一室 |
| 104 | 3月19日 | 草花 | | | | |
| 105 | 3月21日 | かたミの直垂(未成) | | | | |

【第2表】「招待状認済扣」にみる招待者

※各人物の職業・肩書は必ずしも明治32年時点のものではない
〈美術関係〉

①日本美術院

| | |
|-----------|------------------------|
| 橋本雅邦 | 日本美術院 主幹 |
| 小堀鞆音 | 日本美術院 実技担任（絵画） |
| 尾形月耕 | 日本美術院 実技担任（絵画） |
| 松本楓湖 | 日本美術院 実技担任（絵画） |
| 川崎千虎 | 日本美術院 実技担任（図案） |
| 桜井正次 | 日本美術院 実技担任（金工） |
| 塩田力蔵 | 日本美術院 学術担任 陶磁器研究家 |
| 関保之助 | 日本美術院 学術担任 有職故実学者 |
| 高山林次郎（樗牛） | 日本美術院 学術担任 文芸評論家 |
| 二条基弘 | 日本美術院名誉賛助会員 華族 |
| 近衛篤磨 | 日本美術院名誉賛助会員 華族 |
| 高田早苗 | 日本美術院名誉賛助会員 学者 |
| 富田鉄之助 | 日本美術院名誉賛助会員 銀行家 |
| 大倉喜八郎 | 日本美術院名誉賛助会員 実業家 |
| 都築馨六 | 日本美術院名誉賛助会員 官僚・政治家 |
| 鳩山和夫 | 日本美術院名誉賛助会員 政治家 |
| 久保田譲 | 日本美術院名誉賛助会員 文部官僚 |
| フエノロサ | 日本美術院名誉賛助会員 美術史家 |
| プリンクリー | 日本美術院名誉賛助会員 軍人・ジャーナリスト |
| 坪内雄蔵（逍遙） | 日本美術院特別賛助員 小説家・劇作家 |
| 尾崎紅葉 | 日本美術院特別賛助員 作家 |
| 大橋乙羽 | 日本美術院特別賛助員 作家 |

②東京美術学校

| | |
|--------|----------------|
| 東京美術学校 | |
| 浜尾新 | 美術学校設立時の校長事務取扱 |
| 黒田清輝 | 西洋画科教授 |

③その他

| | |
|----------|--------|
| 東城鉦太郎 | 清雄門下 |
| 塚原律子 | 清雄門下 |
| 小林習古 | 日本画家 |
| 筒井年峯 | 日本画家 |
| 久保田米遷 | 日本画家 |
| 野口小籟 | 女流日本画家 |
| 跡見玉枝 | 女流日本画家 |
| 竹村千佐 | 女流日本画家 |
| 合田清 | 版画家 |
| 杉山令吉（三郊） | 漢学者・書家 |
| 永井素岳 | 書家 |
| 小林義雄 | 室内装飾家 |
| 宮川香山 | 陶芸家 |
| 小川一真 | 写真家 |
| 鈴木真一 | 写真家 |
| 中嶋精一（待乳） | 写真家 |

〈学術・学校関係〉

| | |
|-------|-------------------------|
| 外山正一 | 英文学者 帝大総長 演劇改良会会員 川村家親族 |
| 菊池大麓 | 数学者 帝大総長 箕作秋坪の子 |
| 箕作佳吉 | 動物学者 帝大教授 |
| 矢田部良吉 | 植物学者 帝大教授 演劇改良会会員 |
| 穂積陳重 | 法学者 帝大教授 |

| | |
|----------|-------------------------|
| 横井時冬 | 経済学者 東京高等商業学校教授 |
| 増嶋六一郎 | 法学者 英吉利法律学校（のちの中央大学）校長 |
| 福澤諭吉 | 思想家 慶應義塾創立者 |
| 日高秩父 | 東宮学問所御用掛 宮中顧問官 |
| 松平康国 | 漢学者 |
| 小杉温邨 | 国学者 |
| 福羽美静 | 国学者 |
| 黒川真道 | 国学者 黒川真頼の子 |
| 宮地厳夫 | 国学者 |
| 小嶋泰次郎 | ロシア語学者 |
| 小嶋憲之 | 建築家 箕作佳吉の友人 |
| 長郷泰輔 | 建築家 |
| 青山胤道 | 医科大学教授 |
| 佐藤三吉 | 外科医 帝大教授 |
| 高山紀斎 | 歯科医師 高山歯科医学校（のち東京歯科大）設立 |
| 長与専斎 | 医師 衛生局長 |
| 同 称吉 | 専斎長男 医師 |
| 宮下俊吉 | 眼科医 |
| 巖本善治 | 明治女学校校長 |
| 津田仙 | 農学者 梅子の父 |
| 津田梅子 | 華族女学校教師 |
| 渡辺（石井）筆子 | 華族女学校教師 |
| 音楽学校 | |
| 盲啞学校 | |

〈政財界・官界〉

| | |
|---------|------------------------|
| 高木豊三 | 司法官 貴族院議員 |
| 春木義彰 | 司法官 貴族院議員 |
| 栗塚省吾 | 司法官 衆議院議員 立憲政友会 |
| 名村泰蔵 | 司法官 |
| 松本荘一郎 | 鉄道官僚 箕作麟祥門下 |
| 青木周蔵 | 外務大臣 |
| 寺見機一 | 外交官・実業家 日本郵船ウラジオストク支店長 |
| 木内重四郎 | 官僚 貴族院議員 夫人は岩崎弥太郎次女 |
| 高崎安彦 | 官僚 高崎五六の子 |
| 江原素六 | 政治家 立憲政友会 川村家親族 |
| 星亨 | 政治家 立憲政友会 |
| 高橋是清 | 政治家 立憲政友会 夫人は曾根達蔵の妹 |
| 嶋田三郎 | 政治家 立憲政友会 |
| 曾根荒助 | 政治家 農商務大臣 |
| 波多野伝三郎 | 政治家 福井県知事 |
| 辰巳小二郎 | 政治家か |
| 堀田連太郎 | 実業家 衆院議員 |
| 川田龍吉 | 実業家 日本銀行総裁川田小一郎の子 |
| 川田豊吉 | 実業家 函館ドック社長 川田龍吉の弟 |
| 原六郎 | 銀行家・実業家 |
| 森村市左衛門 | 実業家 森村財閥 |
| 浅野総一郎 | 実業家 浅野財閥 |
| 三井八郎右衛門 | 実業家 三井財閥 |
| 三井三郎助 | 実業家 三井財閥 |
| 益田孝 | 実業家 三井物産社長 |
| 中上川彦次郎 | 実業家 三井財閥 演劇改良会会員 |
| 高橋義雄 | 実業家 三井呉服店理事 |
| 成瀬隆蔵 | 実業家 三井同族会主事 川村家親族 |
| 岩崎久弥 | 実業家 三菱財閥 |

| | | |
|----------|-------------|----------------------|
| 岩崎弥之助 | 実業家 | 三菱財閥 |
| 高田慎蔵 | 実業家 | 高田商会主 |
| 米倉一平 | 実業家 | 米商会所頭取 |
| 近藤廉平 | 実業家 | 日本郵船社長 |
| 上原多吉 | 実業家 | 日本セメント株式会社支配人 |
| 渋沢栄一 | 実業家 | 銀行家 演劇改良会会員 |
| 野田谿通 | 実業家 | 台湾製糖会社 |
| 井上角五郎 | 実業家 | 政治家 南満州鉄道設立 |
| 毛利（山本）重輔 | 実業家 | 日本鉄道会社副社長 明治3年アメリカ留学 |
| 三島弥太郎 | 政治家・銀行家 | 三島通庸の子 |
| 西園寺公成 | 宇和島伊達家家令 | 実業家・政治家 |
| 久米民之助 | 土木技術者・実業家 | |
| 守田治兵衛 | 実業家 | 守田宝丹主人 |
| 平岡広高 | 新橋料亭花月楼の経営者 | |
| 榛原直次郎 | 聚玉堂「榛原」主人 | |
| 江沢金五郎 | 天賞堂（銀座の印章店） | |
| 飯塚伊兵衛 | 玉宝堂 | |
| 後藤猛太郎 | 実業家 | 日本活動フィルム社長 後藤象二郎の子 |
| 岩谷松平 | 実業家 | 岩谷商会会長 |
| 吉沼又右衛門 | 日本橋の時計美術商 | |
| 富士見軒 | | |
| 金清楼 | | |

〈陸海軍関係〉

| | |
|----------|------------|
| 西郷従道 | 元海軍大臣 |
| 榎本武揚 | 海軍卿 旧幕臣 |
| 山本権兵衛 | 海軍大臣 |
| 樺山資紀 | 海軍軍人 文部大臣 |
| 沢鑑之丞 | 海軍軍人 旧幕臣 |
| 向山愼吉 | 海軍軍人 旧幕臣 |
| 山本淑儀 | 海軍軍人 旧幕臣 |
| 伊藤雋吉 | 海軍軍人 |
| 中村松太郎 | 海軍軍人 |
| 木村浩吉 | 海軍軍人 旧幕臣 |
| 安原金次 | 海軍軍人 |
| 土屋保 | 海軍軍人 |
| 桂太郎 | 陸軍大臣 |
| 野津道貫 | 陸軍大将 |
| 久我通久 | 陸軍軍人 東京府知事 |
| 森林太郎（鷗外） | 陸軍軍医総監 |
| 保利真直 | 陸軍軍医 |
| 石黒忠恵 | 陸軍軍医 |
| 賀古鶴所 | 陸軍軍医 |

〈華族関係〉

| | |
|-------|---------------|
| 一条実輝 | 公爵 海軍軍人 |
| 岩倉具定 | 公爵 明治3年アメリカ留学 |
| 徳川家達 | 公爵 貴族院議員 |
| 徳川慶喜 | 15代将軍 明治35年公爵 |
| 松平康民 | 子爵 旧津山藩主斉民の子 |
| 松平直亮 | 伯爵 旧出雲藩主定安の子 |
| 酒井忠興 | 伯爵 旧姫路藩主忠邦の子 |
| 酒井忠道 | 伯爵 旧小浜藩主 |
| 浅野長勲 | 侯爵 旧安芸藩主 |
| 鍋島直大 | 侯爵 旧肥前藩主 駐伊公使 |
| 蜂須賀茂韶 | 侯爵 旧徳島藩主 |

| | |
|-------|---------------------|
| 小笠原寿長 | 子爵 旧小倉新田藩主 |
| 戸田氏共 | 伯爵 旧大垣藩主 明治4年アメリカ留学 |
| 桜井忠胤 | 子爵 旧尼崎藩主忠興の子 |
| 大谷光演 | 伯爵 東本願寺法主 |

〈外国公使館〉

| | | | |
|--------|----------|--------|--------|
| イギリス公使 | アメリカ公使 | フランス公使 | ドイツ公使 |
| ロシア公使 | イタリア公使 | 清国公使 | スペイン公使 |
| オランダ公使 | オーストリア公使 | メキシコ公使 | |

〈印刷関係〉

| | |
|-------|--------------------|
| 桧原陳政 | 印刷局 清国公使館勤務 |
| 斎藤知三 | 印刷局 |
| 下村孝光 | 印刷局 |
| 鴨下友次郎 | 印刷局 |
| 細貝為次郎 | 印刷局 |
| 木戸小太郎 | 印刷局 |
| 本多忠保 | 印刷局 |
| 佐田清次 | 印刷局 |
| 三輪潤太郎 | 実業家・政治家 凸版印刷の創業を支援 |
| 八尾新助 | 活版出版業 |
| 星野錫 | 印刷業 日本印刷株式会社社長 |
| 秀英舎 | 印刷会社（大日本印刷の前身） |

〈演劇関係〉

| | |
|-------------|--------------------------|
| 長田秋涛 | 劇作家 |
| 伊原敏郎（青々園） | 演劇評論家・劇作家 都新聞 |
| 依田百川（学海） | 漢学者 劇作家 演劇改良会会員 |
| 福地源一郎（桜痴） | 劇作家 演劇改良会会員 歌舞伎座創立に関与 |
| 皆川四郎 | 東京電灯取締役、歌舞伎座初代社長 渋沢栄一の親族 |
| 苗村又右衛門 | 銀行家 実業家 のち歌舞伎座会長 |
| 渡辺儀助（桂文左衛門） | 落語家 |

〈出版・文学報道関係〉

| | |
|----------|-----------------------|
| 龍居頼三 | 新聞記者 日報社 |
| 宮川鉄次郎 | 新聞記者 都新聞主筆 |
| 大岡育造 | 中央新聞社主 政治家 立憲政友会 |
| 田川大吉郎 | 新聞記者 都新聞 台湾新報 |
| 塚原靖（洪柿園） | 作家・新聞記者 東京日日新聞 妹は塚原律子 |
| 岸田吟香 | 作家・新聞記者 東京日日新聞 |
| 黒岩周六（涙香） | 作家・新聞記者 万朝報 |
| 陸実（羯南） | 新聞記者 日本新聞 |
| 巖谷季雄（小波） | 作家 |
| 落合直文 | 詩人 国文学者 |
| 大橋新太郎 | 出版者 博文館 |
| 吉川半七 | 出版者 吉川弘文館 |
| 平岡浩太郎 | 玄洋社社長 福陵新聞 |
| 吾妻健三郎 | 印刷技術者 「風俗画報」創刊 |
| 太田万吉 | 出版業か |
| 前田健次郎 | 新聞記者 朝野新聞 |
| 京華日報社 | |
| やまと新聞社 | |

〈不明〉

| | | | |
|------------------|-------|------|------|
| 苗村半次（苗村又右衛門の家族か） | 西田収三 | 中嶋高 | 保利 |
| 聯 | 阿久津晋 | 竹田秀雄 | 杉山仙介 |
| 郎 | 大橋豊次郎 | 中嶋藤吉 | 森川弥平 |
| | | | 田中熊三 |



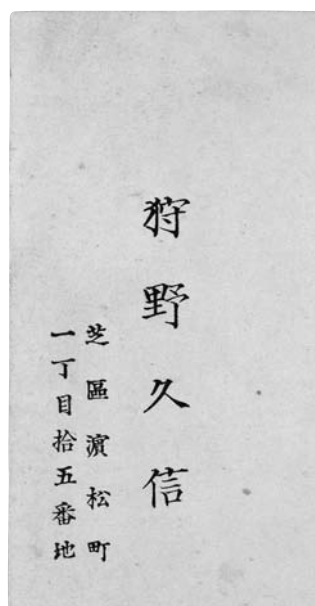
⑤新聞スクラップ



⑥招待通券（表）

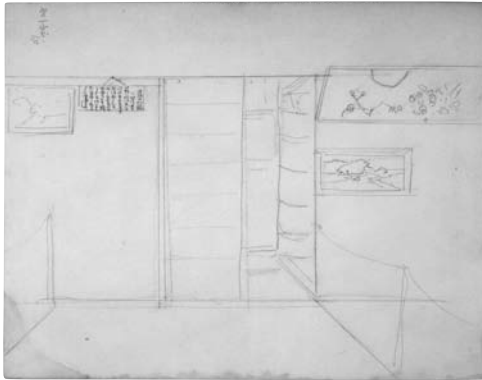


⑦招待通券（裏）

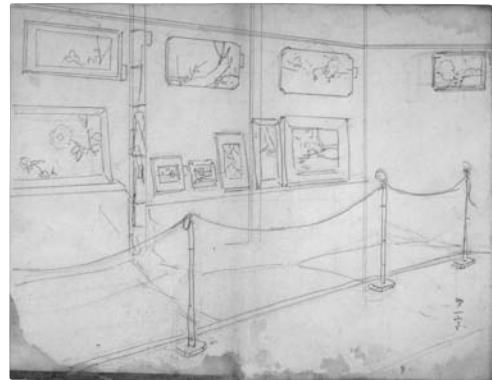


⑧「狩野久信」名刺

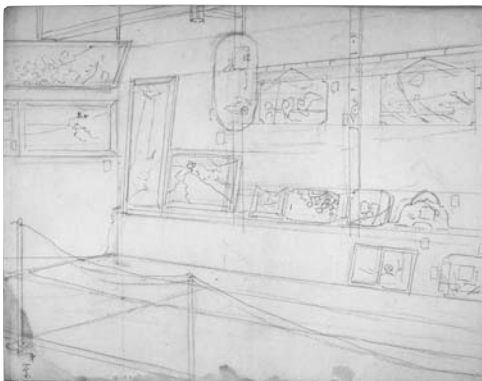
【写真2】「川村清雄氏揮毫油絵展覧会」会場スケッチ



①第一室入口（資料番号05004012）



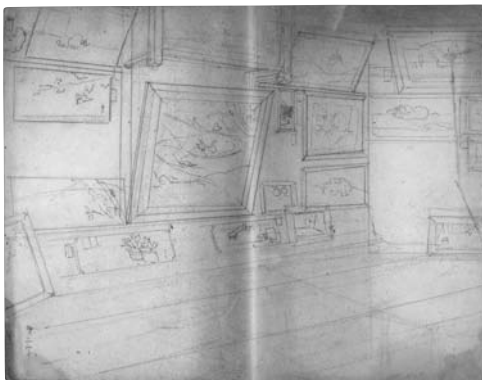
②第一室（資料番号05004013）



③第一室（資料番号05004014）



④第二室（資料番号05004015）



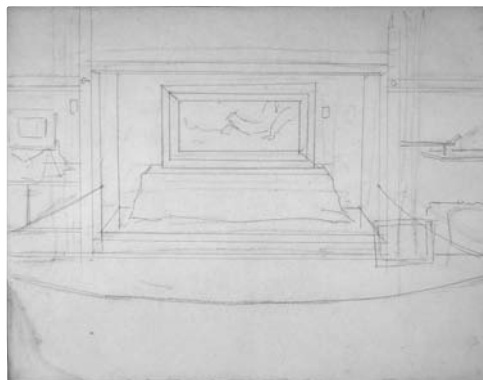
⑤第二室（資料番号05004016）



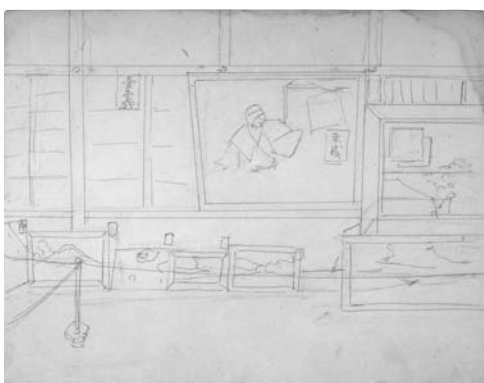
⑥第二室（資料番号05004017）



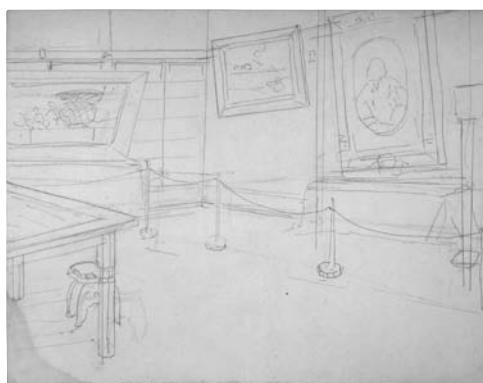
⑦第二室之分 (資料番号05004018)



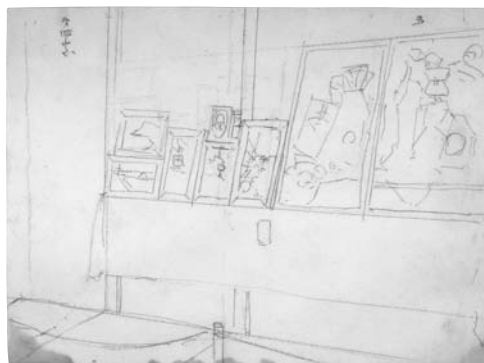
⑧龍図 (資料番号05004019)



⑨形見の直垂 (資料番号05004020)



⑩福島海軍少将像・貴賤図 (資料番号05004021)

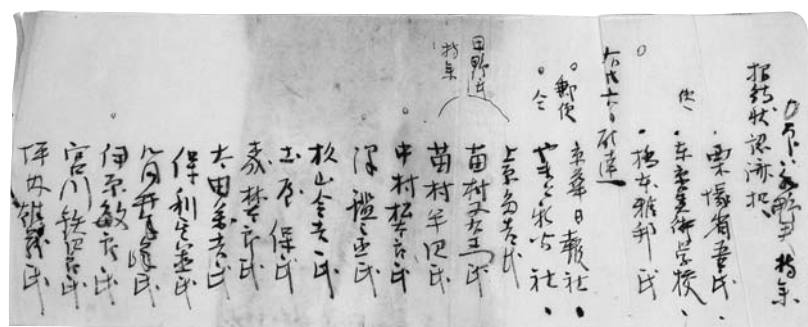


⑪第四室 (資料番号05004022)



⑫第四室 (資料番号05004023)

【写真3】「招待状認済扣」(資料番号04001509)



本文

（凡例）

- 一、本文には、読解を助けるために適宜句点を施した。
- 一、旧字体は、当用漢字あるいは常用漢字に改めた。
- 一、本文に表記された合字の「より」は開いて表し、割注は一行で表示した。
- 一、加筆や斜線等が施された部分には、当該箇所を「」で表示した。
- 一、新聞記事スクラップのうち、原資料では連載記事の一部に欠けているところがあるが、筆者によって補った。
- 一、新聞記事の原文に付けられているルビは省略しているが、難読箇所のみ生かした。

川村清雄氏揮毫油絵展覧会日誌（資料番号05004138）

（表紙）

「川村清雄氏揮毫

油絵展覧会日誌

明治三拾二年二月廿五日起 於日本美術院

初 廿五日

此ノ日天氣清朗ニシテ一天拭か如ク、之レ川村氏将来ノ吉祥ヲ寿スルナリ、加フルニ本会ヲ開設スル^{（ニク）}当リ大補助ヲ与ヘラレタル小笠原子爵殿ヲ始トシテ杉山及ヒ大橋ノ両氏遠路態々ノ来会ニ接シ、本会ノ光榮之ニ過キス、本日開会ノ運ニ至ラズ、都合ニヨリ来ル廿七日ニ延期シタルモ、參觀者三名アリ、本日登院者、川村先生始トシ曾弥・神谷・田野・吉益・亀山・水野ノ諸氏ナリ、本日受取タル絵画左ノ如シ

勝伯

龍、夕浪、聯トウモロコシノ図

メ三枚

小笠原家丁

一、貴賤、黄海々戦、

薔薇二鳩、「滝」（斜線）、

「蝸牛ニ秋草」（斜線）、

近衛家

一、牡丹 但シ黒塗板

田安家

一、秋草 但シ黒塗板

（加筆）「龍、蝸牛ニ秋草 曾根鍵治氏 三枚」^{（ママ）}

一、同秋草 但シ神代杉板

「川田豊吉」（赤斜線）新小川町川田男爵様

小石川区大塚窪町八番地 「山本淑儀」（赤斜線）

一、宝萊山

斎藤知三 「小石川区白山隣」（赤斜線）

一、桜草 但シ杉板

一、紅葉萐 但シ黒塗板 （加筆）「戸田次郎氏」

一、猫二鈴 原氏 （加筆）「アズマヤ 黒塗板」

（加筆）「赤売品」

一、月ニ秋草 小形神代杉板

一、岸打浪 （加筆）「赤」

一、難船 中村松太郎

麹町区土手三番町三十三

一、桜狩 神代杉板 「巖谷季雄氏所有」（赤斜線）

牛込区東五軒町陸番地

一、浪二千鳥 円額 「横井時冬氏所有」（赤斜線）

一、バラ 赤杉板 「苗村又右衛門氏所有」（「田野金」「苗村半次氏」を訂正上書）

訂正上書

一、仏像 古木 勝伯所蔵

一、雪中鹿 麴町区元園町一丁目拾番地「栖原陳政」(赤斜線)

一、山水 (加筆)「本多忠保氏」

一、洋風山水 (「向山慎吉」を削除)

大田万吉

一、美男カジラ瓦 檜田神代杉板

一、ニワ鳥 神代杉板 杉山氏所有

(加筆)「保利真直」

一、梅花 神代杉板

一、ボケニ豆花 絹地 (加筆)「杉山令吉」

一、ベニス景色 曾根鍵次氏

一、浜林ノ山水 △

一、滝ニ鳥 (加筆)「筒井年峯」

一、山水 カラス 木村浩吉氏 △ (「向山慎吉氏」を削除)

一、バラ洋皿 (加筆)「鴨下友次郎氏」

一、鷺 小笠原伯爵

一、猿 同

一、△福島海軍少将ノ像 海軍所ノ有

一、墨堤朝景 宮川氏ノ有

一、柳景色 五姓田氏ノ有

一、春日ノ景 (加筆)「細貝為次郎氏」

一、海岸景 木戸小太郎氏ノ有

一、梅ニ犬ハルコ (加筆)「下村孝光氏」

一、水辺ノ柳景 △ (加筆)「鴨下友次郎氏」

一、柳ニ鳩 △

一、ベニース景色 小形△

一、晩秋ノ景 △

一、花壳 但シ杉板柱掛ケ

一、ベニース景色 中形

一、梅ニ色紙 赤杉板 苗村半次氏

メ 四拾九枚

今日午後七時頃ヨリ祝杯ヲ掲ク、当直者田野金八・吉益耳童・亀山凌雪・

水野義一、右四名、弁当昼四ツ、晩五ツ

廿六日

天候朗ニシテ朝来二十有余名の参観者アリ、開会ノ用意漸次整備ニ趣ク、小笠原子爵殿午前九時頃ヨリ参院アリテ、事務進行ノ教示アリテ、午後一時頃帰邸ニ付カレタリ、尚ホ先生ニハ早朝ヨリノ参院ニテ、開会執務ニ熱心ニシテ、午後八時頃曾祢氏ト共ニ腕車ヲ連テ帰途ニ付カレタリ、本日到着ノ絵画左ノ如シ

一、頼朝ノ石橋山 (加筆)「小松宮殿下御所蔵」

一、童子肖像 栗塚氏

一、草刈女ノ山水

一、小形猿 △小林習古氏

一、死犬 (加筆)「伊原敏郎氏」

一、海底ノ頭蓋骨 (加筆)「木村浩吉氏」

一、洋風ノ裝飾 森林太郎氏

一、檳榴 小島氏

一、柳沼 塚本 △

一、溪谷景 同△

一、柳景色 平木氏 △

メ 拾一品

弁当十本、晩食ヨリ自炊ヲナセリ、当直ハ前日同然

二十七日

本日曇天、川村先生早朝ヨリノ御出勤ニテ裝飾ニ従事セラレ、事務稍ヤ完備ニ趣ケリ、先生ニハ病苦アリト雖トモ更ニ御懸念ナク、益勇ヲ興シ斯路ニ熱心ナル事、実ニ驚クニ堪ヘタリ、參觀者拾数名ニシテ、内三名ハ通常券者ニシテ其ノ他ハ招待者、併シ斯道ノ学生ナリ、小笠原子爵ハ本日参院ナシ、田野氏本日用生ズ、帰宅セラレタリ、当直者吉益、亀山、水野ノ三名トス、車夫留吉モ同様、川村先生ニハ事務ノ都合ニヨリ宿直セラレタリ、曾祢氏ハ不相変御精勤ナリ、本日受取タル画左ノ如シ

一、四ツ谷津ノ守ノ景

一、西洋ノ裝飾

一、泰西ノ少女

一、海岸景

一、海岸畑ノ景

一、田舎ニ稻荷ノ鳥居

一、神社ニ鳩

一、僻村ノ景色

メ九枚ハ印刷局ノ出品

市内各新聞社へハ招待状配達済ナリ、市内各名士等へモ同然

二十八日

前夜ノ雨降ルモ、今朝ヨリ晴レタリ、參觀者三十有余名、内廿名ハ通常券者ナリ通券料壹圓下足十七錢入、本日受取タル画ハ左ノ如シ

一、寒牡丹 黒塗板

一、貝桶 神代杉

一、仏御前 新小説原図

一、乱レ箱ニフクサ

一、水辺ニ夏草

（加筆）「一、景色ニ小鳥一羽あり」

一、柳ノ景色

右春陽堂出品

（削除）「二、皿に子犬之図」

一、小犬ノ図 皿 西郷氏

一、カンムリ 扇面 杉山氏

一、瓦ニでしこ 聯

右九枚当日出品

陳列追々整頓セリ、当直川村先生・吉益・田野・亀山・水野・喜^カ、以上六名、十二時寢床ニ入ル、国民新聞社結城氏ヨリ本会開設ヲ記載セシ廿八日ノ新聞紙拾数枚寄送セラル、招待状百拾四枚配達セリ、長田秋涛・宮川鉄次郎二氏来館

三月一日

本日は、昨夜来の雨やまずして終日降続き、為めに折角の日も来館者の足を停め遺憾限りなし、如此き天候にも係らず、午後小笠原子爵監査の為め態々来場せられ、ひとしを諸氏の勇氣いやまし、順々と整頓に向ひたり、然し而子爵は日暮帰邸ニ就かれたり、続て曾祢氏も退場せらる、来館者拾壱名、内壱名通券、壱名招待券、余ハ美術学校生徒、外ニ結城素明君等なり、収入金高通券料五錢下足八錢、雨の為め画の出品壱枚もなし、招待状八十余通認め、滝田ニ配達を托す、勿論遠方は郵便ニ托す、晚餐ニ寿しの御馳走いづれも美腹、宿直先生・田野・水野・亀山・吉益・滝田、明朝の用事等万般済まして臥床すれば、時計十二時を報ず

二日

午前中晴れ模様なりしか、午後終ニ雨となり殆んど梅雨の如き天候にて、

折角く続々来観する人の足を停め、本日の参観者世余名、内通常券十五枚七十五銭下足十九銭、招待券壹枚、其余ハ院内の案内及美術学校学生等なり、婦人三名小人壹名ありき、午後二時頃川村先生帰宅せらる、曾根氏は夕方一寸来場せられしのみ、国民新聞社より結城氏出張、説明の用向其外読売新聞紙上に掲載する筈にて、二葉観風氏龍及鶏の図を謄写せられたり、出品の油絵は、賀古鶴所氏より鶉の図黒塗板壹枚、此余招待状の漏れし分大抵相済ましたり、宿直田野・吉益・水野・亀山の四名なり、今朝より美術院用掛りの植木屋之紹介にて、給仕としていねと云ふ婦人を雇入れたり、一同臥床二就く十一時なりき

三日

晴天、順々と来観者あり、其数五十余名内通券料壹円五十銭下足料三十九銭

新聞社の招待二名、特別招待者津田仙・東城鉦太郎・中島藤吉・栗塚省吾の諸氏なり、尚栗塚氏の同伴者仏国美術省日本派遣委員巴里府画学教授法監督フェリックス、レガメー氏来観、種々批評アリキ、此説明ハ追て栗塚氏迄問合す筈なり、本日ハ先生始小笠原家よりも出張なし、特ニ開会以来目立しは、午前二警官の来場且仏国人の来観なり、出品画ハ高山林次郎氏より海岸の景色一枚のみ、明治美術会より名簿一部取寄せたり、宿直田野・水野・亀山・吉益・滝田老なり、臥床十時半

四日

早朝よりの雨にて、終ニ来観者四名、役員一同の徒然思いやられ候、其内壹名は招待者五姓田芳柳氏他は通券此料十五銭下足四銭とす、監督の出張一人もなし、夜二入りて雨霽れたり、宿直田野・吉益・水野・亀山・老滝田の五名なり、臥床十時半、金子家敬君来りし二付、神田パノラマ館へ広告の件依頼せり

五日

快晴、本日は日曜日二付、開場時間前よりの人もあり、招待者を加へて多数の来観、其役々皆多忙を極めたり、招待の貴名は、伊原氏を先発として鴨下・川田・杉山・平岡・細貝・木戸・小林習古・横井時冬・中村海軍・本多忠保・土屋・巖谷ノ十三氏及当院招待の高橋太華・鈴木真の二氏、加へて曾根氏印の分十枚、外二枚、其外は自来集の会員浅井・亀井・小坂・石川・渡部の諸氏等にて、尚招待の婦人を伴われし人も多く、其総数^(人々)人余なりき通券料五円廿五銭下足料壹円八銭、午前より曾根氏川村先生も来場せられたり、日暮帰路せらる、本日出品の画は左の如し

一、浅草土産 亀山君使 銀地扇形寒牡丹二枚 栗塚氏

一、丸盆 二枚 神田男爵

一、鶏の図 松平男爵

一、泰西婦人の肖像 外山正一氏

メ六(五を削除)枚なり

日暮田野君帰宿、宿直吉益・水野・亀山・滝田喜三之四名なり

六日 此日読売新聞附録二龍及鶏の図掲げあり

天候快晴、通券の入場者五十八名、招待者には高山氏を始め小堀・塩田其余の諸氏拾余名ありき、婦人の来観者も数名、尚外国人の来観二名なりき(通券料二円九十銭下足料六十銭)、曾根氏正午過より来場、閉館後帰邸、金清樓借出しの件二付結城氏来らる、長田氏へ曾根・川村両氏の連名にて依頼状を出す、尚塚本氏へは水野君を派出す(曾根氏の状を持て)、芦原曠夫北陸新聞の通行上縮図の爲め来れり、午後十一時過川村先生来場せられたり、水野・吉益兩人日暮より別方面ニ会用にて外出、亀山君ハ自宅至りて泊れり、宿直川村先生・田野・吉益・水野・滝井兩名外臨時一人なり

七日「快晴なり」を削除

快晴にして来観者之足を続かしめ（通券料三円十五銭下足料五十五銭）、招待二於ては山内子爵を始めとして日高文子女史・円山・山本等の諸氏外拾数名なりき、曾根氏不相変来館、諸事指示せられ、一同劣らず各方面の役に怠りなく勤めたり、開館中安田氏の件ニ而吉益神田二使へす、尚閉館後も別会用にて外出、九時過にかへる、古坂氏へ葉書を出せり、速かに来場、種々囑託の件を終れり、出品画壺枚もなし、宿直田野・吉益・水野・亀山・滝井五名

八日

開場時間前降雨ありしも、幸ひに定時刻より晴れ、続々と来観者二接したり、本日重なる来賓には、南部伯爵及令夫人二御伴等を併せて八人余、夫より江原・西山・徳富・日高・森村・角田の諸氏なりき通券料壺円八十五銭下足料廿七銭五厘、曾根氏午後来場せらる、当日売品ノ札を附シタリ、川村先生揮毫ニ多忙、小笠原丁氏一寸来場せらる画具一本半コバルト拝借せり、亀山君会用にて外出、夜ハ水野君、古坂君へ葉書神中氏の宿所通知を出す、今や美術院ノ境に紅白の梅日に晝を開き、楼上陳列室と共に二色を競ふ如く、来賓の展覧室ニ入つては画の神妙ニ心を驚かし、眼を左右しては思わずゑみを漏し、椅子にたよりて楼下を觀むれば、老梅の香氣全身にまとひ、上下其艶を異にすれども、各精神を慰むるにやぶさかならず、来る者なんぞ道の遠き天候のあしきに逢ふとも辞せざるべし、むべなるかな日々来観者の加ふる俗客も自然ニ衣襟を正すことなるべし、宿直田野・吉益・水野・亀山・喜三の五名とす、

三月五日発行太陽五巻の五号掲

◎ 川村清雄氏ハ今の洋画家中一種出色の技巧を有する人なり、氏の作品展覧会は去月二十八日より谷中美術院にて開かる

◎ 三月六日時事新報ニ評あり

◎ 同月同日日本新聞ニ短文記事あり

九日

曇天、重なる来賓なし、招待者も少く、只音学々校女生徒四名、外通券者（通券料壺円廿三銭下足料廿一銭）とす、曾根氏不相更来館、閉館後廿四日迄延期を議決し、楼上招待席ニ於て同氏及川村先生・田野・亀山・水野・吉益の諸君着席、大広間ニ備へし神酒を頂き祝杯を挙げ、吉益会用にて夫より外出、亀山は自宅へ帰泊せり、午後十時頃より雨となる、宿直川村先生・田野・水野・亀山・吉益・滝井、出品画金清楼ノ鸚鵡の図壺枚、梅二雀の大額壺枚、売品の分とす、此夜寒むし

拾日

早起すれば思わざりき銀世界、鷺毛飛んで四辺の風色いとおもしろく、開会中の美観を呈せり、右の如き天候にて来観者の程如何と案じたるに、延期の義いまだ発表せざる為め続々と足を絶たず、尚正午より（霽）削除日光を漏せり（通券料七十銭下足料六銭）、古坂・金子両君来りし二付、市中広告張りを依頼せり、且古坂君ハ明日より本会へ通勤を諾せらる、川村先生午前栗塚氏迄一寸訪問せらる、曾根氏午前来場せられたり、午後五時半より吉益君美術院の車にて江原素六氏及福井つる氏・本間清雄氏の元へ出品依頼の為め至り、夜十二時二帰場せり、途中曾根氏へ葉書を出す、加へて亦もや雨となる、宿直川村先生・田野・吉益・水野・亀山の諸君ニ滝井二人とす

拾一日

曇天、土曜日二付、早朝より来観多数、重なる来賓としては、大谷派新法主御令弟と家扶兩名、次ニ此接待二付杉山氏非常ニ勞を取られたり、夫よりは画師独乙人「アドロフ、フイセル」夫妻午前来館、非常ニ陳列

品優秀ニ驚嘆感極まりて午後を約す、三時頃ニ写真器を携へ、龍及売品の梅ニ雀の図を写す、更ニ川村先生の^(前略)撮影、附するに保利真直氏の梅の画を添ふ、此時や院内の庭ニ右画を持出して写せり、折しも新法主客人の来観中にて、其他の来場者皆一時庭園ニ出て傍観せり、生憎此記をなす者階上の用向多く充分ニ実境ニ接するを得ざりき、然し而右梅の売品新法主客人より御買上の榮を得、本会一同いわず語らず悦喜万堂にニ充々たり、此「アドロフ、ワイセル」氏ハ各国美術上取調べの為め派出せられし人なり、依而川村先生を欧米各国に紹介せんと欲す、右之如く写真器を持参せられしなり、多数の出品中殊ニ龍、梅、二枚の所有者の得意思へやられ候、次ニ池の端画報社よりも撮影を申込ミ承諾を与へたり、種々ある内にて当日拾枚斗り写せり、其外来観は山東・益田孝・亀山君の母堂・狩野・尾形月耕の諸氏其人数十名の招待客あり通券料四円七十一銭下足料九十銭五厘、古坂君本日より出役、午後三時頃より新浜の福井氏・桜井氏・本間氏へ会用にて使、生憎雨となり、福井氏の桜狩杓枚高塚氏のかささぎ杓枚借用持かへらる(今朝福井氏より葉書来る)、本日廿四日迄延期通知の葉書を出す、其文面左之如し

拜啓、当展覽会之儀、続々出品有之、略整頓候ニ付テハ、出品者の依頼モ有之、本月廿四日迄開会延期致候間、御来観被下度重ねて御案内申上候、勿々敬具

曾根氏午前より来場、不相更多忙、日暮退場せらる、金子君ニ広告紙三葉託す、杓葉毎ニ招待券三枚添ふ、拾時頃より雨やミて亦もや雪となる、此頃の天候不順、寒はなほだし、宿直川村先生・田野・古坂・吉益・水野・亀山・滝井二人とす、当夜招待席ニ於て川村先生の画談等ありて臥床十二時過となる

拾貳日

快晴、夜来の雪朝日ニ解けてうるわしく、後の残りは道ゆく人の足をあ

やまし来り、観る人は折角の日曜日ながら延期もせしことに心ゆるミしか、前日程のことともなかりき、重なる来賓には、宮川鉄次郎氏・嶋田三郎氏・松本常盤氏・岡精一氏の諸氏及自来集の会員且国民社の阿部氏等とす、川村氏正午より二時迄自来集へ出席(通券料三円五十銭下足料五十銭)、曾根氏何故にや来場なし、午前古坂君本間氏へ絵借用ニ付出張、肖像杓枚借用せり、尚同氏へ春陽堂の画杓枚預く、新宿停車場へ広告紙一枚滝井老ニ託す、田野君自宅へ帰泊、宿直川村先生・古坂・吉益・水野・亀山君及喜三とす、寒さはなほだし

拾三日

快晴、延期広告の効続々と来観ありき、重なる来賓ニは、松井子爵・横井時冬氏・大橋乙羽、岡倉・橋本の両令嬢とす(通券料壹円七十参銭下足料廿三銭)、松本常盤氏より五緒車ノ図桜花ニ田鈴ノ図二枚出品せらる、川村先生午前築地迄一寸出張せらる、曾根氏午後来場、日没後帰邸、古坂君自宅帰泊、宿直先生・田野・吉益・水野・亀山・滝井二人とす

拾四日

快晴、重なる来賓川崎千虎・跡見玉枝・松浦誠の諸氏なりき(通券料壹円也下足料五十二銭五厘)、正午川村先生代々幡へ帰邸、曾根氏午前来場、夕方帰路ニ就かる、富士書店写真屋同伴、田野君会用にて外出、自宅へ帰泊、宿直古坂・吉益・水野・亀山・滝井とす、景色の画拾円杓枚、売品ニ陳列

拾五日

快晴、重なる来賓ハ、石黒男爵・大橋氏紹介の婦人壹名及桜井氏等とす(通券料壹円九十銭下足料卅銭)、曾根氏早朝より来場せらる、更ニ高等尋常兩師範学校・日本美術協会・美術学館・工業学校へ招待状を出す、午前田野君安田善次郎氏出品の牡丹の図を持参、是にて場中増々美観を呈せり、

亦諸方へ広告紙として廿枚古坂君担当にて午後より外出、亀山君自宅帰泊、宿直田野・吉益・水野の三人なり（田野君自宅用にて俄かに帰泊せり）

拾六日

雨天、来観者少数なりき、博文館写真部員出張せり（通券料^{（全）}下足料^{（欠）}）、曾祢氏午前来場、閉館後帰邸、吉益・水野・亀山三名外出、宿直田野・古坂・滝松三名とす

拾七日

曇天、三時過より雨となる、本日重なる来賓にハ、川上子爵其余普通招待券数名とす（通券料壹円廿銭下足料廿九銭）、曾祢氏午後三時後來られ、閉館後帰邸せらる、田野君事故ありて午前より自宅へ帰泊、宿直古坂・吉益・水野・亀山・滝松とす（加筆）「十一日分260491」

拾八日

快晴、重なる来賓二ハ、松岡寿・益田英作・桜井正次氏とす、其余高等師範尋常師範学生・工業学校等数十名なりき（通券料式円六十銭下足料四十九銭）、奈良真順君の紹介にて、本宿常子氏より丸板色紙^{（杜力）}□丹図・菜花二綿の木図・塗板三枚出品せらる、是にて現在陳列品は九十六枚の数となれり、田野君午後より出勤、曾祢氏午前より来場、不相更諸事要務を終へて閉館後帰邸、私用にて亀山・古坂君一寸自宅へ、宿直田野・古坂・吉益・水野・亀山とす

拾九日

快晴、加へて日曜日、且や春の彼岸にて来場者二百名二近し、重なる来賓には、福羽子爵・箕作博士、櫻村・大沢・保利ノ各国手、其余招待者数名とす（通券料五円廿五銭下足料壹円十五銭五厘）、午前先生久々来場、揮毫の都

合二より正午帰邸、曾祢氏は例日之通り、小笠原子爵閣下亦久々にて来場せられ数時間ニして帰館せらる、兎角続々来観多数二付、一同競ふて役々多忙を極めたり、渡部胖君の紹介にて出品二枚、倉地寛裕氏^{小引}戸草花二図、田野君用事にて自宅へ帰泊、宿直古坂・吉益・水野・亀山・滝松とす

二十日

快晴なりしが生憎の風にて、来観者は高等師範学校の学生及普通のミとす（通券料壹円廿八銭下足料拾六銭）、曾祢氏来場なし、田野君午後より出勤、古坂君自宅へ帰泊、宿直田野・吉益・水野・亀山・滝松とす

廿一日

快晴、加ふる二大祭日とて朝より続々来観者多し、重なる来賓二ハ、高木豊三氏・斎藤・巖本・小嶋の諸氏等とす（通券料三円六十二銭下足料七十四銭）、先生も午前より来場せらる、且「かたミの直垂」の図未成出品せられ、公衆の眼をひとしをひけり、曾祢氏も来場、閉館後先生と帰邸せらる、田野君自宅へ帰泊、本宿氏への預書今朝奈良君迄渡す、宿直古坂・吉益・水野・亀山・滝井とす

廿二日

快晴、来観不相更続々あり、重なる来賓二ハ、松井子爵・金清楼・巖谷・長田の両文学^{（著）を修正}□等（通券料壹円九十銭下足料卅一銭）とす、先生午前来場、二時間程にて帰邸二つかる、曾祢氏ハ閉館後、宿直田野・古坂・吉益・水野・亀山・滝井とす

廿三日

快晴、来賓の重なるは、竹村氏・竹内千佐女史・神田男爵・佐藤等の諸

氏と其余ハ高等師範学校生とす（通券料式円五錢下足料卅四錢五厘）、富士書店へ状を出す、田野・古坂君外出泊、宿直吉益・水野・亀山の三名とす

廿四日

本日ハ閉会当日なりしが、生憎朝よりの雨にて熱心なる少数来観ありしのミ、先生・曾根氏も来場、閉館後楼上ニ於て曾根氏其余ハ役員一同集まりて仮りの閉会祝宴を開く、更ニ残務掛りとしては迄の役員引続き事務を取ることにし而寝ニ就く、宿直田野・古坂・吉益・水野・亀山・滝井とす

廿五日

快晴、閉会を知らずし而来りし人数名ありき、混雑の際なりしも入場を諾せり、先生・曾根氏不相更来場、出品者への礼状文言左之如し

拝啓、時下春和之候益々御清廉奉大賀候、偕而先般来本会開設ニ付、永々御秘藏画拝借仕り、御蔭を以て盛會を極メ首尾能く昨日にて閉会仕候事、是全ク御厚意ニ外ナラズト奉感謝候、就ては右額面一枚謹て御返納申上候間、御査収被下度再々奉願上候、先ハ不取敢御礼迄、草々敬具

年月日 油絵展覧会（印）

何某殿

右筆者水野義一君、第一室より四室迄の陳列室実写縮図、吉益耳童是を担当せり、余の役員ハ其余の雑務ニかゝれり、宿直田野・古坂・吉益・水野・亀山・滝井とす

廿六日

曇天、早朝より荷送りの準備ニかゝる、第壹車は代々幡方面へ積出す喜三郎受持、第二車ハ田野君の受持にて赤坂方面、第三車には古坂君受持として神田より日本橋麻布方面、第四車ハ本郷牛込麴町四谷方面にして

亀山君受持たり、尚別動として根岸方面三口水野君受持、終つて同人より辞職申出下宿二午前引取れり、右積出しの終りしハ午前十時十五分なりき、夫より後掃除、残務ハ吉益・滝井兩人にて引受け、午後壹時に大抵終りたり、午後二時半曾根氏東本願寺の受取を持って退場せらる、滝井老下村氏迄出品画返済の爲め派出せり、右にて残りの額面ハ左ノ通り、小松宮殿下御所藏品、小笠原子爵所藏悉皆、山本淑儀氏所藏壹枚、外ニ西郷侯爵所藏壹枚とす

（新聞記事切り抜き）

①国民新聞

● 河村清雄氏絵画展覧会（桂陵生）

（一）（明治三十二年二月二十八日付）

海舟先生其の永眠に先つ数月客に語りて曰く『己の生きてる中とう／＼河村ほどの画家を見なんで仕舞つた』、此の一語清雄氏の清雄氏たる所以を説明して余りあり、

氏は嘉永五年番町に生る、七歳にして祖父某奉行となりて長崎に赴任するに及び共に行き同所にて土佐派の名手住吉内記の門に入り九歳大阪に帰り田野村小虎に師事す、時は壬生に伏見に浪士の血汐のなまぐさくして四囲の風物悉く活動しつゝ、ありし日なり、変平らぎ江戸を改めて東京となすに及び開成所画学校に入り初めて洋画を宮本三平に学ぶ、後政府より欧米各国に留学生派遣の議あるや氏乃ち徳川家よりの給費にて政治学研究のため明治三年三月米国に赴きアルポール校に入る、然れど学科は常に放擲して画のみ研究しつゝ、ありしかば同学外山正一氏等科を転ずるの反つて氏に利あるべきを察し中間大ひに周旋するところあり、遂ひにワシントンに行きランマン氏の許に寓せしむ、居ること三年更らに徳川家に申請して巴里に赴きヅカリアス氏の塾に入る、氏が洋画に於て造詣するありしは蓋し此の時なりしなり、後徳川家よりの給費絶ゆるに及

び私費を以て伊太利に遊びヴェニスに留りて自働自活益好める道にいそしむ、時の代理公使宇都宮三郎氏深く其才を惜み改めて政府の留学生となす、氏即ち潜心古今に涉獵して其の技を磨くこと前後七年はじめて洋画に日本的の想を加へ自ら發明せし大胆なる筆法を以つて古格を破つたる画を同地展覧会に出品し大ひに監識者の好評を受く、茲に於ひて行李を収めて日本に帰り印刷局の御雇となりしが一年にして主義合はざる故を以つて職を辞す、而かも当時の社会未だ氏を容る、程の發達をなさず一時は非常の窮迫に陥りしが、勝伯在り其の天才を識認して自邸に同居せしめ百万奨励周旋して其技を扶く

氏此処に在つて徳川歴代の肖像四枚を描き又海軍省の依頼により海軍将校の肖像十四枚を描す。其縁縁は氏が経営慘憺して案出せるものにして巧みに和洋を折衷し今に其道の人々が垂涎置く能はざる所たり、廿七年中同邸を辞し再び諸方に流遇して憾軻頗る不遇をかこちしが征清の役畢るに及び伊東祐亨氏聘を厚ふして氏に黃海海戦の大画幅を描かしむ、画今は納めて海軍水交社にあり、爾後今日に至るまで小笠原子爵の邸に寄寓し其庇蔭に依る、今回谷中に開かれたる展覧会亦名は門生の發起なれども子爵の尽力十の九に居るとぞ』

多数集合しての展覧会共進会は従来我邦にも少なからざりしが一私人の展覧会に至つては曾つて其例なく全く今回の清雄氏を以て矯矢とす、従つて準備万端至らざる多く加ふる各出品は孰れも諸家の珍藏する所として永き開期を許さざるは頗る遺憾の事なれど、配置及光線の具合に至つては清雄氏自身頗る苦心して指揮せしめ是れまでに見る能はざるの整頓をなし又夫の場に入つて先づ眼に苦痛を感じざるの憂なし、

以下序を追ふて其主要なるもの、説明を試みるとす。蓋し批評は彼に足らざるあり我に余れるある辺に於てなさるべきもの吾人は不幸にも清雄氏に対しては之を有する能はざればなり

（二）（明治三十二年三月一日付）

絵画の要は自家の意志を發揮し尽くして余蘊なきにあり、毫も他の制肘規律を許すべからず、然れど風土を同ふし習性を同ふし衣食を同ふせる時代に出で、は小異はありとも必ずや大同の精神其中に在らざる可からず、妄りに当代と懸け隔りたるものを作り出して独り自ら高ふするは作家の謹まざるべからず処時勢に阿るの要はなきも時代の潮流と合する事に於ては画家元より其心がけなかるべからず、縦令又なしとするも真に其の技の妙に入りたるものは必ずや斯くあらざるを得ざるなり、時代の異なりたる王朝幕府時代の画風を模写して只其の巧ならん事を之れ求め、風土の同じからざる泰西の筆意を直輸入して只其の違はざらん事を之れ願ふもの、如き研究の一助参考の一端としては如何のものにや

清雄氏亦此処に見るありしもの歟、描法は総て洋画なれども結構は全く日本画にして両者を和熟せしむる点に於ては頗る苦心せるもの、如し。今回展覧会第一室に陳列せる『福島海軍少将の像』に就て之を見るに普通洋画の描法を以て正装せる半身像を描き色彩も浮立たず綜条も乱れず故少将の性格を写し出して遺憾なきさへあるに、氏は之を以て足れりせず其の胸中にありし或る嗜好を……即ち日本人が其の美なる山河に依て養はれたる或る共通の嗜好を満足せしめんために先ず像の背後を寂びたる古代模様にて書きつづし尚其框は総て金たたきとなし斯くして先ず無味なる画像に日本的趣味を加へ而して其框は総て桜として外廓を水に縁めたる『藻勝見』となし、中廓は轡唐草に勝見を飛ばせ内廓は巨瀬金岡の描きたる聖賢障子の聖賢形に一つ置きに勝見を受け尚其趣の単調に失せん事を恐れて下部程良き処に鍍金の青海波を嵌め之に千鳥をあしらひ其の下は態と椽の彫刻を變じて更らに趣を深からしめたり、而して像の頂上天の位に中将少将が御即位の大札に用うべき唐冠三笠山を置き左右に奈良菊三個を点じ葉は西洋風に卷かしめ冠の前端通常羅の下がるべき処に中古欧州に於て騎士の使用せし盾を打ち之れに像の氏名を書き入るる事

とし尚之に対する下部地の位には海軍に縁み貝に錨と桜の花とを組み合せて以つて上部の冠を受け錨よりは鎖あり左右に開らきて端に各一個の海馬を附す、而かも其の海馬は普通にては妙ならずとてシトロジョーによりて足を附し加ふるに態々古色を鑄き出さしめしたため桜の木地と相待つて愈面白く武骨一点の武人の像も茲に於てか花は桜の趣あり、此の像は他の十三枚と共に八年以前本宿宅命氏の囑により海軍水交社のために描きしものにして椽は悉く之と同じく人物は西郷大将の像尤も傑作なりとの事なれど此処には特に故人を扨んで陳列せしもの由、氏自ら語るらく、『花鳥山水は日本に居て日本のものを描く事故自然に筆も日本化すれど、洋装せる人物を洋画に描き出し而かも之れに日本的嗜味を加へんとするは頗る困難なる事にして漸く額椽によつて其要求を満足せしむるを得たり』と、然れど退て熟視すれば亦少しくコリ過ぎたるの嫌なきにもあらず。

(三) (明治三十二年三月二日付)

『福島少将の像』と相對して楼上第一室に陳列せられたるを勝伯所藏の『龍』となす、大幅なり、清雄氏自ら之を説明して曰く

未だ勝さんの御厄介になつてゐる頃でした、左様已歳ですから七年前ですが、十二月半ば時分に不図龍を描いて見様と云ふ氣になりました、色々腹の中で考へて居ります中大晦日は近くなる借金取は来る如何にも仕方がないです、それで御恥かしい話ですが借金逃れに仕上げて見様と思ひまして先づ血だらけな馬の頭を持て来てそれを皮剥にしてモデルに致し角は鹿、爪は鷲、頭の凸凹して居る処は榮螺で胴には蛇を使ひました、書き始めたのは暮の廿五日で、出来上つのが大晦日の夜の八時頃でしたが丁度其の日は大暴しで夜になつては余程凄う御座いましたので天気具合が適つて非常に面白かつたのです、それで出来上ると直ぐ私は借金取を待せて置いて母屋へ参りまして先生の御氣に入りの女中に面白い物を見せて上げるから一寸入らつしやいッて連れ

て参りますと、外は大荒で中に此の龍が居ます、此れは如何なさつたのですと云ひますので私が借金取が来て困りますから此の下へ坐つて居て皆驚かして追払ふつもりですと云ひましたら暫く考へて居ましたつけが其のま、母屋へ歸つて半時ばかり立ちますと百円持つて来て先生が買つて下さると云ふ事になりました。只もう夢中で書いたのですから苦心も何もありませんが此の足には困りました、皆書けば釣合が変ですし、書かなければ勢がありませんしそれで斯様云ふ風に浪をかけたのです、此の頭の上にあるのは雲が上かつてそして蒸されて落ちて来る所です、能く御覧下さい鼻からも少し息を出させて置きました。

画は思ひ切つて全景を暗くし中央に少しく上向きて龍の首あり、右に下つて足を示めし胴は一ねぢりして右の上額に隠れ更らに幅外を通りて左の下方に尾を現はす、浪は左より右へ龍の右足にかけ例の大胆なる描法を以てなぐり付けられ脚部に火焰あり浪の伏したる辺に映る極めて壮大の結構なり。由来龍の如きは東洋特殊のアイディアリストの作る処にして洋画にて描きたるが如きは全く破天荒の業に属す、然れば氏の此の作の如きも欠点はあるべし、唯人の未だ開きたる事なき天地に入り兎も角も事の決して為しがたきにあらざるを公示せし点に於ては特に注意するの価値は十分ならん歟

ウエロン氏曾て美術を分ちて齋前人の模倣を事とするものと、直ちに実物を師とするものと、自家の性情を發揮するもの、三とす、而て近時画界の製作理想画と見ゆるは多くは第一に隸属し他は悉く第二のみ、偶第三者の如く見ゆるあるもそは技芸衰退の余過渡せんとして常に起り来る索新求奇の一風に過ぎず、此の画の如く高を求めて怪に失せず而かも一筆一描悉くよる処あるに至つては蓋し其数少なかるべきか、作家の性情写し出されて余蘊なし、其のモチイゲの借金取に責められしと責められざりしとの如きは元より些末の外情のみ以て作家の意志の真なりしか否かを驗すべきにあらず

（四）（明治三十二年三月三日付）原本には貼付されていないが筆者により補った文学や美術や音楽や彼等は悉く時代の反響たり、時代其ものが形を具ふることなくまた其の精神の眼に見られ耳に聞かるる能はざる間は彼等の存在蓋し止むを得ざるもの歟

明治の時代は日本の日本が世界の日本となり東洋的の凡てが西洋的の凡てと和熟しつつある時代にして従つて其の権化たる文学美術も頗る両者の調和に努め或ひは既に至れるもあり或ひは未だ至らざるもあり混沌区画の分かれざるが如きあるも其調和せんとする精神に至ては蓋し一のみ、今に解釈せられざるは啻其方法を先にして洋を後にすべきか洋を先にして和を後にすべきかと云ふ問題なり、小坂象堂氏の『小春』の如き結城素明氏の『新緑』の如き亦研究の点は凡て之に向へるものの如し、而かも呉人の立場よりして之を見るに絵画の必要条件たる色の出し方光線の研究、明暗濃淡の描法の如きは洋画の発達せること遙かに邦画の上であり、実物写生の術に於ても我の彼に及ばざる亦遠はし、依是觀之先づ洋画に入りて絵画の必要条件を究はめ然る後徐ろに出てて日本の趣味を之に加へんか、成功は反つて近かるべく、邦画を本として洋画の趣味を咀嚼せんとする或一派の画見の如きは三角形の一辺を以て他の二辺の和より大なりとするものか、然らずんば、柱もなく鴨居もなき処に襖を建て障子を嵌めんとするに類するなきか

清雄氏の見亦之に同じきや否やは吾人知らず、然れど其の作は悉く洋より出でて和に入りしもの、洋画なる名を冠せんよりは寧ろ光琳の一層進化して色の出し方に一生面を開きたる邦画とこそ称すべけれ、第一室に掲ぐる所の神代杉の掛額四面は即ち這般の趣を顕現せるものにして就中保利真直氏藏『梅』の如き木地を遠山とし極めて重く残雪を点じ之れに老幹斜に右に向へる梅花を描く、雪のワットリとしたる花の趣ある様は異れども宛然たる光琳なり、其隣なる杉山令吉氏所藏『鷄』亦之と同一結構にして少鷄二羽米粒を拾ふて立てる傍らに破碗枯草秋海棠あり碗の

前に狐拳の起上り小法師二個を点せしが他の一個は遂ひに置く可き地点を見出す能はずして碗の後に隠れたる事とせし由、同室中尚同じ意匠の『秋草』（川田豊吉氏藏）『鳩』（小笠原子爵藏）を陳列す。秋草は武蔵野に光琳風の水をあしらひしものにして銀にて片破月をつぶし野分に草の伏したるを図し『鳩』は省亭風にして傍に薔薇あり一羽は後向き一羽は片羽をひろげたる様を写す、元神代杉に油絵を描き殊に木地をあらはすが如きは、古人に例のなき事なれど『神代杉と云ふものは日本固有のもので仲々趣がありますし棄てるのが何様も惜しいから』とて清雄氏の創作せしものな、由なれど瀟洒にして趣深かし

右四枚は氏が卅一年の夏中小笠原子爵の属により平素の投げやりに似ず努めて描写せし卅枚中のものにして『鷄』を尤も傑作とす、『秋草』には無理なる所あり、『鳩』は木地と羽色のうつり思はしからず

（五）（明治三十二年三月四日付）

小笠原伯爵所藏『鷺』は階下第四室にあり、門生桜井某の名を以て廿三年内国博覧会に出品せしものなるが其実は氏の意匠結構する処にして筆亦多きに居ると云ふ、図は『龍』に次げる大幅にして左に苔蒸す巖あり下は即ち潭にして流れて千里の激流となる、右に下つて小岩あり水懸りて前は一樣の大浪に枯葉二三点浮きて漂ひ岩上飛沫重きほとりに左足にて小兎を押へ羽を開らひて将さに水を撃つて翔らんとするの鷺あり、天は暗く浪は黒く勢ひ頗る壮、然れど仔細に此図と夫の『龍』とを比較せんか何人と雖も其間に区画の明かなるあるを見るべし、『龍』に於ては凡て自然に調和しつつあれども、『鷺』に於ては強てせしめんとする痕あり、彼には余裕あれども是は頗る窮屈に彼は樗の一枚天井の如きも是は何となく寄木細工の觀あるを免れず、啻其画家至難の業たる翼の側面を無造作に書きこなしたるに至ては昔も今も変わらざる作家の手腕を見るを得可し

『岸打浪』は氏の名を署せる作の中にて尤も多く各処に見らるゝものな

れども殊に優れたるは第二室陳列する所の勝伯所蔵に係るものなり、浪に香あり空に声あり人をして思わず藤村氏の「暗き潮の湧き立ちて」を誦せしむ、色彩頗るおだやかにして香粉を点ぜるのみの事なれど岩上の苔亦趣深し、氏が勝邸に寄寓せる日故先生の秘蔵せる犬偶々他の嚙むところとなり斃ほる、氏乃ち斃れしままを写生して井原静郎氏に送る、今回列て第二室にあり、第三室の勝伯所蔵『唐もろこし』の聯は氏が同邸に赴きて間もなく土蔵の前にて描写せるものの由にて竹は節あるもの故之に節ある唐もろこしを描きしは縁離れずして面白く乾きたる所へ青と白とをのせしは釣り合失はれずして頗る可なり

杉山令吉氏蔵『木瓜に豆の花』は司馬江漢の跡を習ひ絹地に濃き色彩を以て描写せるもの、日本画にては到底此れ丈の光沢と色とを出す能はず、絹に油絵の具を用うるは頗る難き業なるを、是れ丈けに落ちつかせしは必ずや深き苦心のある事ならん、小松宮御所蔵『石橋山』は一見して水彩画の如くに又頗る緻密の画なれど氏は『鷄』『鷺』に於けるが如く随処に筆を省きたり、由来洋画に従ふ者が幅の全面を悉く塗りつづすは空気を写すに於ては或ひは些の貢獻あるべきも為に画が「かたくなつていけませぬ」の弊は免るべからず、氏が点すべきには遠慮なく点じ省くべきには仮釈なく省き毫も古格に拘泥せざるは後進の須らく就て学ぶべき所ならん、漣山人所蔵『桜狩』は矢張り地は神代杉にして中央より右の上部に向ひて桜の幹あり根は態々書省きて上一面即ち桜の後辺に赤毛氈を布き落花二三点群青の扇と赤き团扇と小鼓と堇と桜の小枝とあり春日家眷打群れて先づ鉄道馬車にて浅草に赴きそれより向島に出て堤伝ひに千住より王子に狩り暮らせるもの、如く群青の扇殊に面白し、『桜狩』と同列にして色彩描法全く異りたる一面の額あり、是氏の処女作とも云ふべきものにして富田鉄之助氏の所蔵なり、折紙あり「此額は、明治五年同氏（清雄氏也）米国在学中西洋画に志を起し学業の余暇画て余に贈る所當時余も亦米国にあり、富田鉄之助」と記す、就て以前と現時の作

に於て如何に氏の描法の変化したるかを見るに足る可し

（六）（明治三十二年三月五日付）

氏又好みて黒漆板に描く、板面滑かなるを以て用筆は凡て日本筆の由、今回陳列するもの十数面あり、近衛公蔵『牡丹』曾根健次氏蔵『秋草』を以て傑作とす、木村浩吉氏蔵『黄海戦後の海底』には海舟先生の題辭あり、水つく屍に青藻漂いて海底の浪頗る面白し、徳川伯蔵『秋草』は氏が黒漆板に手付けたる最初の作にして趣は全く抱一なり、板は元揭示板なりしものの如く処々に薄く字の跡あり、色彩も大分黒み居れり、中村大尉蔵『紀伊国丸難船の図』は大尉の実験に基きて描きしもの、由、小笠原子爵の題詩あり、由来黒地若くは光沢ある板面に色を出すは画家の尤も難しとする処にして四囲の空氣によつて物の性格を表す能はず、畫画それ自身によらざるべからざるにより外人の作にても黒扇又は鏡面に描けるは只スケッチせる寧ろ絵画の範圍に属せざるもの、みにして氏の作亦単に裝飾的に限られたるもの、如し、真正美術としては如何歟、小笠原子爵の所蔵は多くは新作品也、頭腦に各般の趣好を有し手腕に東西の調和を有する清雄氏が近時如何なる方面に向て進みつゝあるかは凡て子爵の所蔵に於て之を見る可し、『瀑布』の如き『大原』の如き何ぞ『龍』『鷺』又は『鷄』と相去るの甚だしき、氏は此等に於て確に一転化を試みしなり、前の作に於ては氏の目的は西洋画と日本画の調和にありしも今は其範圍なり超脱して自家の意志を發揮するに力を専らにせるもの、如く尚一段進んで之を解釈すれば従前の氏の意志の凡ては如何に東西を調和せんかと云ふにありしが今は其中に余裕を生じ余裕乃ち發して此等の作となりしものの如し、『大原』は大幅にして右に葉繁き柳あり色を用うる浅くして頗る濃く影を古藻の沼に写す、沼は水極めて静にして岸によつて大原女あり、其赤き帯全景のゆるやかなるに對して釣り合殊に可なり、沼を隔てて紫を帯ひたる空あり、長閑に平遠の山を写し中央沼の対岸に貴人牛車に乗じて春を尋ぬるあり、全幅迫らず色彩の配置、空

気の具合又頗る見る可し、『梅』の如き『秋草』の如きは少しく奇に走りたる観なきにしもあらねど此の画に至つては「おとなし」くして毫も重くるしき感なし、之を要するに氏は一個の天才にして一切煩密の紀律未だ之を牽束せざる間に十分技術上の発達をなし今漸く自家の本領を見出して之に向つて進み行かんとするもの東西の調和と云へるが如きは其の方法のみ目的にあらず、若し河村清雄の製作として日本美術史上に或る説明を要すべきものあらば其は当に今より後の製作たるべく、吾日本絵画が一度は氏の取つたる方向に従つて進まざるべからざるは吾人の断じて疑はざる所たり、然れど斯く一転化する事の氏に取りて利なるか不利なるかは全く別問題にして氏の天職が単に画家に止まるべきか否かと共に今尚？の中にあるなり

ラムネー氏嘗つて説をなして曰く『草木花卉は皆地中より出でて各其生をなす、地なくんば初めより草木なし、絵画彫刻の建築に於ける亦斯くの如く建築あつての絵画なり、世界美術の歴史を見るに完全なる発達をなしたる地に於て先んぜるは常に建築なり、従て斯道に志す者の第一に研究すべきも亦建築なり』と、吾人は社会が舊儀式的に歴史的に絵画彫刻をのみ之れ尊びて明治の今日建築美術の殆ど忘れられたるが如きを悲しむと共に清雄氏の如き天才を此の方面に用うる能はざるを惜しむ、事情許すべくんば吾人は氏をして画家たらしめんよりは寧ろ建築家となして縦横に東西の調和をはからしめん事を望むものなり

「以上国民新聞掲載」

②都新聞

● 河村清雄氏の作品（上） S、S（明治三十二年三月十五日付）

谷中展覧会所見

今の絵画界に一異彩を放てる河村氏が新古諸作品を蒐めて去月より谷中美術院に其の展覧会を開かれき、同氏が経歴譚及び斯道に対する意見等

ハ曾て本紙の「浮世めがね」によりて江湖に紹介せる因もあれバ聊か茲に其の作品に閱して余が管見を掲げん、扱て通観する所文字通りたる大作ハ例の故勝伯が所蔵と聞えし▲水上の龍 ならん、此の作に於ける氏が苦心及び興味ある逸話ハ彼の「浮世めがね」に載せられバ読者ハ尚ほ記憶せるならん、彼が此の空想的しかも東洋的な画題を専ら写真に傾ける西洋画によりて表示したる意匠と胆力ハ感嘆するに堪えたり、又その或る実在せる天然物より部分的の標本を見出し例へバ馬頭によりて其の頭を描き、榮螺によりて其の突起を描き、蛇身によりて其の鱗を描きたる如き此等の奇巧亦賞賛の値なしとせず、誰か此の作を見て氏が苦心の切なると用意の綿密なるを認めざる者なからんや、然れども其の弊や余りに現実に泥めり、よし部分的とい言へ愁に天然物を標本に取りしだけけに古への丹青家もしくは詩人が全く其の空想より産出したる如き一種幽玄の趣致を欠けたるに非ぬか、直截に言へバ余りに浮世じみたるにハ非ざるか、余りに俗氣に近きにハ非ざるか、而かも此の欠点ハ氏が空想的に属する諸作品に通じて屢は之を見る、例へバ小笠原子爵の出品に係れる▲平安朝の貴賤 と題する歴史画の如き其の一ならん、是亦前者に次げる大作にして緑陰滴らんとする下一条の小流あり前面の小徑に車駕の練り行くを下人の跪座して拝せるさま技巧の至れる事恐くハ衆目の見る所否とする者なからん、蓋し氏が有職故実に精しくして又土佐春日等の古和画に通ずる或ハ今日の洋画家中に其比を見ざるべし、然れバ画中の車乗衣冠の其の真を得たるハ是亦疑ひなからん、而も之に對して千年前なる平安朝の天地に身を置きたるが如き感を生ずる事薄きハ何ぞや、思ふに此の作家が余りに現実に泥みたる其の一因にハ非ぬか、其の長く豊かに繁れる柳の枝の渚に垂れて翠色淡き着色の如き（聞くが如くんバ以太利のカラーが作品中に屢ば此の類を見るとか）、この作家独得の妙技として賞賛掩く能はずと雖も特に平安朝と限られたる歴史時代の風物としてハ余りに近世的なり、此の近世的なる背景に平安朝の衣冠せし人物を

置ける為め其間に調和を見ざるを如何せん、此の点より氏を今日に於ける他の芸術家に匹を求めバ小説家にありて露伴ならずして紅葉、梨園にありてハ団洲ならずして梅幸ならんか、「浮世めがね」に於て彼が美術家と信仰との關係を説き又画想を養ふに和歌を学べと言ひたる、其頻りに有職を学び絵巻物にヒントを求むる宛然絵画界の露伴もしくはハ団洲に彷彿たるに拘はらず其の作品の理想よりも写真に優り時代物的よりも世話物的に長ぜる寧ろ紅葉もしくはハ梅幸に比する非ならんか、其他▲石橋山合戦▲蓬萊山 等、いづれも技巧の熟すると共に此の点に於て非難を免れざるべし、只画題の奇を以て一顧すべきハ勝家所藏なる▲黄淮海戦後の海底 なれど要するに氏ハ空想を描くに失敗せると共に写生的の作に大いに成功せるもの、如し、請ふ余をして暫く他の優りたる側を観察せしめよ

(下) (明治三十二年三月十六日付)

余ハ一流の評者の如く神韻もしくはハ氣品の点に於て日本画西洋画より優れりと信ずる者に非ず、又洋画必ずしも写生にのみ長ぜりと主張する者に非ず、然れども河村氏の作品に於てハ神韻を寓し又ハ空想を表示する点に於て多くの欠点を見出せるを如何せん、只その写生的即ち現実的の方面に於てハ流石に其の技倆を賞賛するに躊躇せざるなり、独り写生的の画題に妙所を見るのみならず其の東洋趣味(寧ろ日本画的趣味)を折衷したる者に於て大いに抉目すべきものあるを信ず、彼が東洋的な龍又ハ蓬萊に於て成功せざりしハ其の東洋的な為めに非ずして其の空想的なりし為めならん、現実的の画題に於てハ此の東西折衷の間に屢々妙味を見る、彼ハ其の歴史画に絵巻物よりヒントを求めたる如く花鳥画に於てハ景文又ハ光琳等を咀嚼して自家の藥籠中に置けるもの、如し、彼が光琳の水を悦び又広重が錦絵の着色を賞せる事ハ「浮世めがね」に於て自ら語れり、而も此等の所好ハ其の作品に於て屢バ実行せられたるを認む、彼がバックグラウンドに金銀を塗抹したる如き、月を表はすに

銀泥を以てせる如き、水を描くに一種模型的なる群青色を用ひたる如き、雲又たハ水の着色の深蒼色なる如き、孰れも日本画より脱化せる彼が新筆致と謂つて可ならん、其の画題を選ぶ点に於ても彼の空想的のものに龍を描き又国史より題目を取れるが如く例へバ植物にありて梅といひ桜といひ牡丹といひ七草といひ恰ど西洋的臭味を脱せるもの多し、或ハ之を貶して俳画的もしくはハ俳諧的なりといふ者あらん、然れども余をして之を言はしむれば所謂日本の趣味あるもの、中にハ其の文学にも美術にも大抵この俳画的もしくはハ俳諧的なもの、存在するを如何すべき、俳諧果して真の美術に入る能はざるか、又此等ハ果して日本の趣味の欠点として捨つべきものなるか、若し東西趣味の調和が今の芸術界に必要な条件なりとせば是れ実に輕々論じ去るべき問題にあらざるを信ず、場中に見る所植物にハ近衛公所藏の▲牡丹 の黒板に描かれたる、徳川公所藏▲秋草 など其の尤なるものならん、動物にハ杉山氏の出品に係れる▲鶏 及び小笠原子爵出品の▲鳩 孰れも逸品と謂ふべきか、本社之青々園が出品せる▲犬の悲劇 ハ一頭の斃狗を描きて画頭甚だ妙ならずと雖も筆致頗る見るべきものと覺ゆ、器財に至りてハ、春陽堂所藏の▲貝桶と香包 など氏が特得の手腕を見るに足る、漣山人が出品せる▲桜狩 も桜樹の下に玩具を散らして上に紅氈の一端を見せたる所謂俳画的の妙味あらん、山水にハ勝家所藏の▲岸打浪 沖より暮る、夕がたの薄黒き浪岩に当りて水泡と砕くるさま場中の逸品として見るべし、本社之宮川氏が出品なる▲幽邃の山水 また其の水の深く濃く見らる、此の作家の技倆を示せり、水交社所藏の▲福島少将の肖像 ハ曾て吾が「浮世めがね」に紹介せる如く其の注目すべきハ額縁の意匠なり、都て彼が絵画と伴ひて日本的室内裝飾に用意し主として額縁に淡泊なる神代杉を利用し又塗板、柾目板、絹地にまで其の画才を試み、或ハ短冊掛或は聯板に応用して成るべく日本建築と西洋画との關係を調和せんと試みたる、嗚呼誰か彼を一種の工芸家として冷評し去る者ぞ、余は之を吾が

美術に忠なる者として賞賛せん

「右都新聞」

③毎日新聞

◎谷中の油絵展覧会（河村清雄氏作品） 芳陵（明治三十二年三月八日付）

久しく病の床に臥し居たるま、美術界の事も筆に載するよしなく此頃になりて少快の折しも、谷中の日本美術院に河村清雄氏作品の展覧会ありと聞き日曜の春暖を幸ひ見物に出掛けたトコロで其結果は満足か將た失望か、世の中は兎角空頼めの事が多いのである

◎氏が自分一人の作品を列ね展覧会を開きて新春第一に美術界の寂寥を破りたるは以て壮とすべく、亦美術家の事業としても愉快の事であるが、第一室より第四室に至る全体を看過し了れば渾然たる美術上の趣味といふものは少しも看客の脳中に残らない、春の淡雪よりも一層消へ様が強いのは美術作品の展覧会として遺憾の限である

◎見渡す処ろ是真的油絵、似而光琳的裝飾画、俳画的作品で半ばを埋めて居る、一寸草花や小鳥を捉へ来り之に俳味を持たせて悦んで居る処是真を油絵で往つた気色がある、併し是真のは東洋画独壇の極軽い筆墨の間に情趣を寓せ^よたればこそ其風韻は画其物の外にも饒か認られて何とも言ざる妙味を感じしめたのであるを、此は正反對に極重い油絵の具で而かも一景一物彼に比すれば極めて真面目に画きたるなれば、^{とて}逆も彼に見らる、如き俳味的消息を此に認めることが出来ない、^{うるしいた}鬆板の研出しに油絵の具を用ひたるは亦是真が鬆絵を得意としたるに似通へども、其器用を示せるのみで第一室の牡丹及び月に菊など黒地の研出されて鏡面の如く又光琳風のぼつとりとしたるなど当込みの外物に助けられて看客の眼を惹くに過ぎないのである、併し花卉禽獸は氏の得意と見へて鳩などはなか／＼によく出来て居る、此の外木地の一寸面白い柱掛けや扇面に画きたるなど氏は其筆の器用を飽くまでも小さ

く（物の面積のみを云にあらす）弄びて娛む画家と見へる、併し斯ふなると油絵も安直に買ふことが出来て寧^{いづ}そ便利かも知れない

◎河村氏の筆は頗る器用である達者である、其器用に達者なのが相手伝つて一方の俳画的作品には一寸粹な遣方を弄そぶと同時に少し大物になつて来ると、例の奇拔を銜ふには非ざるかと思はれる節がある、其作品中で最も多い岩石波濤瀑布は勿論其外何に限らず余り勢が好過ぎるのと色調のコントラストが強いので画面さわがしく殺伐の気を帯びて居て見る眼も甚だ危険^{けんけん}の様な心地がする、丁度今の日本画で云へば、京都の鈴木松年の画と一般なのは美術上の作品としては甚だ取らないところである

（続）（明治三十二年三月十日付）

◎比較的大物になつて来ると岩や波濤^{なみ}や瀑布^{たき}が最も多いのは彼の怒濤の岩に当つて碎くる様或は飛瀑^{みずばし}の水烟立て、絶壁に懸り^{たう}墜々として声あるが如き例の奇拔を見せるに打つて附けの好題目であるからだろう、随て自づと其得意となりたるものか波濤^{はとう}などは一番見られる、併し瀑布は何方も余り感服しない、稍^やや写真的の図柄で趣味がなく又幅に合はしては其丈けが余り短く切つて仕舞い過ぎた気色^{けしき}があつて為めに雄大の觀を殺いで居る、殊に一ツのは鳥が其前を掠めて飛んで居るなどの景があれば今少し丈けを長くしたら森々として凄^{しみ}いまでに見へたかも知れないと思つた

◎此等の最も奇拔を見せるに詭^こへ向きの題目でさへ唯だ写真的に其雄壮なる様を見せて止むべきには非ざるものを他のあらゆる題目までが恰かも筆勢の鋒銳包むべからずといふ如き有様の中に画かれてある、随て色も思ひ切つて濃くし反映^{コンラスト}を強からしむるを念とし居るは筆勢の険しきに加へて其着色に打たれ画全体が険しく荒々しく見へる、美術上の作品としては其筆や色に各々の好みはあるとしても描き出されたる全体の上には渾然たる趣味の發揮せられて温かく高尚に且幽玄なる所

が欲しいのを河村氏のは其の双眸に映じ来る所唯だ燦然たるはあるも之を觀て居て深く咀嚼すべきものなく心靈の上に待ち設けられたる美感を与へられるものが少ない、随て腦裏に印せられて残るものが薄いのである

◎山間野外の景色 画は甚だ少ないが山間の丘上に樵婦を点出したる図と加茂の御幸とでも云ひ左様な大幅は共に極めて濃い緑色が抹せられて居る、例の新派が紫派なら此れは緑派でもあらうか、後者は河村氏が日本の趣味を行かれて絵巻物の景を持ち来りしにて一寸面白いが此両画とも日本画風の時間が説明せられ居らぬ様で先づ雨あげ句のどんよりとした天気とでも見へやうか、野外の景色で最も予の見るべしと思つたのは氏が米国在学中富田鉄之助君に贈つたといふ一画である、水や岸は少しむく／＼として確でない様だが繁る木や人物の辺を初め全体に外には似気ない落附いた作である、其外二三の西洋人の肖像画は甚だ賞すべく稍や深ひ味も感ぜられて居る

◎此外好いのは、昨年の明治美術会展覧会で評判であつた裝飾器具の種類で此度の出品も色の調和が巧みに成功せられて居てカルテインの下に花一朵を置きたる誠に愛すべく殊に猿を添えたる一画など黄色と草色の緞帳の色合実に穩かに調和せられて居る処に深紅色の紐を纏はしむる手際又猿の着たる衣の紅を添へて画を締らせ引立たせたなどは感服といふも愚かで場中では矢張此種の画で喝采を呼ぶより外仕方がない

◎第四室に懸けてある龍の大額は年頃勝伯の座敷で見居たるのだが例の奇抜には無類飛切といふ題目である、龍の頸は原田直次郎氏の觀音の龍よりも手際に往つて居るが同じ日本の趣味を表はすにしても前者の方が能く此題目を洋式絵画に応用し得て而かして洋式絵画としての趣味を深大に保ち得たものと思ふ、第四室の鷺は龍との一幅対とも云ふべきだが左翼の端が少し変に見へる

◎第三室の福島中将の肖像、是れは中の画よりも寧ろ額縁の趣向を見せに出したものでらしい、恰かも左団次が大川友右衛門を火事で見せる様なものだ、傍に説明があつて天には我古代の冠地には鍔金の青海波に希臘のミトロデーに拠りて形くれる海馬を附し千鳥を飛ばせるなど中々凝つたものである、而して其目的は日本の趣味を洋画の肖像に帶ばしめると云ふに在りて其故か肖像のバックも何か模様があるやうに見へた、即ち肖像が打出されて居る壁紙か様に見へた、凝り所に依ると美術品も何時か工芸品になるかも知れない、よく注意すべきだろうと思ふ

◎思ふに河村氏は其性の所好と日本の趣味を専とせる意匠に心掛けるとより其天才は以上の種類の絵画に發揮さるゝに止まるかは知らねど惜いものである、今少し其限界を高めて深大幽玄なる美術の本領を日本趣味の上に見せる様にして貰いたい、切に今日の美術界の爲めに氏が美術の正道に向て忠実ならんを望まざるを得ないのである(完)

「右毎日新聞」

④時事新報

○河村清雄氏の作品展覧會を觀て △△生(明治三十二年三月六日付)
河村氏の作品については、既に美術通信の中にも記しつゝ、左に掲ぐるは、読画生といへる人の所感なり、なほ続いて種々の人の見るところ、想ふよしを記載することあるべし

河村清雄氏が油絵の裝飾的要素に富みたることは、既に聞きつゝ、われはそが油絵として貴ぶべきものなるや否やを疑ふ、氏が洋行中の作の如き裝飾的静物画は、畢竟するに物質的描写の技倆を養ふ方法にして、美術の前階級にはあらずや、それにて鍛へ上げたる腕力の能く如何なる物質の色調をも自在に描き得るものを用ひて、さて幽玄微妙なる自然の美を描き出してこそ、美術たる甲斐はあるなれ、その裝飾的静物

画を習ひたるため、装飾の痼疾膏肓に入り、山水の景物を描くに方りても其装飾眼を以て改竄し了らむはあぢきなし、われは氏が帰朝早々の作に係る山水の如き、装飾じみぬもの、近時の作に見出されざるを嘆ずるものなり

次にまたわが感ずるところは、氏が用筆の非常に健拔自在なることは是れなり、油絵具を以てして髹板等の上にかくまで揮灑し得るものは、恐らくは今のわが洋画界中氏に及ぶものなからむ、然れども自在なる用筆は、筆々必ず或る表現の用に切にしてこそ、初めて自在なる甲斐はあるなれ、若し其顧慮なくして、徒に其健拔に誇るに至りては、畢竟末技の崇拜に外ならず、氏が得意の用筆、果してこの弊に陥ることなからむか

また次にわが感じたことは、氏が色調の甚だ強くして且つ甚だ深きがために、渾然たる趣を欠きて却つて事々しく見ゆることはなり、此はあるひは色彩の形美を喜ぶに過ぎたるか、はた奇抜を銜ふの弊に基くものならむ、顔料を使ひこなす手際の達者なるは甚だ好もしけれど、水が得意の波濤、岩石等に至りては、寧ろ過張做大の病にあらずとせむや、極めて鮮明なる緑色を用ひ過ぎたる樹木及び灰白色の地面雲烟の如きも、またわが眼には少しく異様に感ぜらる

○再び河村清雄氏の作品展覧会を觀て（明治三十二年三月十日付）

左に掲げたるは、是れまた読画生といふ人の所感なり、前の号の続とみるも可し

地面や背景を描かぬが例なる日本画にては、狩野家の自慢の杉戸の絵も、木理は紙縑の地と同視せられ、画面よりは度外視せらる、が故に、さまで目障りとするにも足らねど、さて画面の一材料として木理を応用するは、手品めきたる卑しきとなり、そが仮令地面の皴状、水上の波文または遠山の里煙等の形状に似たる紋理ならむとも、構へて描きたる物と比べては、符徴にだにも及ばず、まして油絵の如き写実の精

到なる画面中に、この符徴を並べ存しては、あべこべの過不足いたく目障りとなりて、たゞ手品めきたる厭味のみぞ觀者の胸懷を撃つなる外、何等の得る所もなかるべし、若し新奇を以て趣味卑き俗眼を感ずと云はゞさもありなむ。真面目の画としては、われ河村氏が神代杉の板にこることを讀むる能はず

日本人の画く油絵の日本趣味あらむは、固より嘉すべし、然れども油絵はあくまでも油絵の色調、油絵の描法ならざるべからず、一部分油絵にして一部分日本画ならむには、決して渾化したる調子を成すものにあらず、況むやその日本の部分のことさら装飾的な光琳模様等にして、油絵部分は依然として例の写実の描法色調ならむをや、これ畢竟接合せなり、鵠なり、これを融合消化と言はずして雜然間錯と言ふ、

とても日本趣味どころの沙汰にあらず、河村氏が近作中、全体油絵の描法と色調とに整へる画の、しかも唯取り出で、写すところの着想の日本趣味なるものは可なり、されど油絵の写実精到なる物を画きたる背景また旁景に、唐突如として光琳風の石青の水、乳銀の目を用ひたるが如きに至りては、徒に新奇を求めたる間雑の工夫にあらずして何ぞや、然りといへども、装飾画として見れば、以上の難も頓蕩し去りて何の批すべきこともなし、われは河村氏の特長を以て、殊に装飾画にありと思ふが故に、なほ氏の製作を喜ぶものなり、唯惜しむ、氏が腕力を以て終生装飾画の範圍に低徊することを、氏や何故に筆を帰朝早々の比の如き自然画に染むることを為さざる、嗚呼わが言非なり、今の作家寥寥たる絵画界に、この静物画の妙手だに得たるは、甘むじて喜ばざるべからざる所以なりけり

次は白鬚生といふ人の、この展覧会に於ける評の又評なりと知るべし、神代杉の板に画けるを、瀟洒にして趣味深しとなし、光琳模様の間雑、肖像の背景の古代模様、または額縁の装飾趣好を以て日本趣味となし、龍といふ命題を取りて画きたるのみの故を以て、洋画に於ける美術上

東洋特殊のアイデヤリストとなして称揚措かざる、桂陵一輩の徒の評言こそは片腹痛けれ、油絵の折角の自然美を、是真一派の团扇画的場^ば当^{あたり}も破り去りたることの痛嘆すべきを覺らず、却りてその墮落を崇拜して濁波を揚げむとす、われ寔に何の意なるかを解するに苦しむ(此項国民新聞参看)

次は感泣子の独りごちなり

華族にして海軍大尉なる小笠原長生氏は、河村氏を誘掖扶助すること、頗る親切を極むといふ、芸術家の為めに喜ぶべし、蓋し世の富める人等が修飾の什として美術品の製作を注文すると、技芸を大成せしめむが為めに作家を扶けて自由の製作に従事せしむるとは、高卑清濁自から異なる所あればなり

○三たび河村清雄氏の作品展覧会を觀て(前)(明治三十二年三月二十一日付)左に掲げたるは、近頃遠方より帰りたる噴飯生といふ人の所感なり、河村氏がなみ／＼ならぬ手腕を有することは、世の人の夙に知るところ、この評は割合にその欠点を直言したるものと知るべし

白雉雌雄の図。神代杉に描きし意匠といひ、配置といひ寔に善し、惜しむらくは二羽共にあるき出しさうに見えず、巧者なる細工師の手に成りたる漆喰細工とも評せむ、こは何故かといへば、第一色彩の研究を欠き、単に白処にホワイトを塗り、隈の部分はブラックとホワイトとを適宜に混じて、鼠色に描出せしに過ぎざるが故なり、そがため空色なく、且つまた総じて堅きに過ぐるの傾きあり、裝飾としては善かるべきも絵画としては未だし、されど日本画工や素人には、所謂受けの宜きものなるべし

景色画。大方位置よく描かれたり、意匠もまた面白し、されど何れも想像的にして天はいつでも青く、山は緑、花は紅と相場の極りしやうなるはをかしからず、この人の一大欠点は自然を失却して空色を描出することを知らず、また画面にデスタントの少しも見えぬことなり、

遠近法を知つて未だ色彩の調子(即ち遠近)を解せず、さきに米国とか伊国とかにて作りしといふ景色画も、皆ナチュラリイにあらず、坊間見るところのコロム絵的とや評すべき、兎もあれ今少し勉強せでは、真のア、チストとはいひ難からむ

スチルライフ。古器物を写生せしもの二三面あり、何れもデスタントを描かず、色彩の調子を知らず、故に前の物も後の物もみな同じやうなる調子にて見悪し、又バックグラウンドに嫌味なところ尠なからず、空気がなし、蓋し伊国大家の門を望むで、いまだ堂に入らざるものならむ

花卉図。臥龍梅ともいふべき古木の大幅は、光琳是真が地下にて、器用なる人とや評すらむ、牡丹を髹板に描きしものは、眼新しき感を起す人もあるべけれど、こは唯洋彩もて日本画を染めしにすぎず、花卉に前後のけぢめなく、これまた色彩の研究を欠きたり、薔薇の図は西班牙画的にして裝飾に適し、陶器画などに相応しからむ、もしこの人をして漆器陶器に描かせなば、外国輸出の数を増すなるべし

瀑布図。是も俗眼をひくものにして勢ひ善き出来なり、この人の画才に富めるはまことに賞すべし。されど水色天色樹色は、例のごとく自然を失して、瀑布の真景にあらざること云ふまでもなし

肖像画。絵そらごと、いふ俗言あり、これは顔面の受光部及び陰影部、衣服、勲章、金の色、バックグラウンド、みな虚妄なり、壁紙の如きものを細かに描き、像の陰を暗く附せしところ、空気なく、距離といふものすこしもなし、堅過ぎたり、活きて居らず、着色またルースとは云ふべからず、宛然押絵の類ひなり、わるくいへば肖像を描くの術を知らずと申さむ

○三たび河村清雄氏の作品展覧会を觀て(後)(明治三十二年三月二十五日付)原本には貼付されていないが筆者により補った

龍の図。場裏最大の画面、先年上野博覧会にて原田直次郎氏の緑龍、

葬式のまさきに立ちさうなるものを見たが、こたびのは恰も青銅製の龍のごとし。総身堅硬これを打てば夏々たる音やすらむ。雲を起し雨を呼び、変幻出没、神通自在の靈蟲とは露思はれず。前肢のあるところ、焰のごとき赤きものあり、いかにも絵草紙的の考案といふべし、理想画を描かば、須らく鱗火とか電光のごとき色の焰を扱ばざるべからず、龍体も暗澹朦朧、雲霧のうちに仄見ゆるが如くありてこそ、なか／＼に人の情をも牽くべけれ。故如何にといふに、何人といへども龍の実体を現実に見たるものあらざればなり

雪中の鹿。この図は光琳を為して、その風趣を油絵具にて描きたるものなり、只着眼のあたらしさは賞すべし

月に七草。髹板を用ひて日本画の様式にしたがひ、油絵具をおきし塩梅、知恵のある仕方なり、されど是れをもて漫に一新機軸をいだしぬ、日本画をして顔色なからしむなどいひ囃さむは、未だ日本画の趣味を解せざる徒の嗤語なるのみ

猿の図、猫の図、鷺の図。みな死せり、剥製の店晒のごとし、概してこの人の造画法は、ビチュウメン、アスファルト等の胭脂色に、パアプルレイキ又はクリムソンレイキを混じて、陰影の部分に限取るものと見え、いづれも柔味に乏しく、堅きに過ぐるの病あり、惜しまざるを得ず、薔薇に鳩、衝立に鸚鵡。鸚鵡の羽、鳩の翼、いなその全体が剥製なり、薔薇も細工物と見えたり、この病は皆ネイチユアを描写すること知らざるに坐す、ざるを世の明盲共、囂々として囃し立つるはをかし、それも其咎、本人もこれらの作が得意なりと聞きぬ

印刷局景色二面。場裏の尤物なり、位置といひ、色彩の配合といひ、申分なし。只惜しむべきは空気を欠けることなり

海岸岩石の図。おもしろしく、意匠最も可し、されど遠近の差別なく、色彩の調子を知らざるは例のごとし、反映色大気のいろを描かざるは、殊にいまだしき心地す

石橋山の図。小額なれど細微に描きぬ、至れり尽くせり、武者の甲冑など又なくよし

さてこの人の画を達筆とか豪宕とかいひて、その筆力を喋々するものあれど、こは意ふに筆遣ひを知らざる徒のみ、運筆上ルースまたはフリイリイなどいへるは、決して意気に略し、あるは巧みに筆数を遣はざるの謂ひにあらず、この人の筆力、なみ／＼ならぬが如く見ゆるは、大方細工物なればなり、真の運筆自在とはいひ難し、もし雪舟先生の為して油絵具をその俣に塗りもて行かば、所謂豪宕達筆の風趣、いかでか得ざらむや、世の昧者これを是れ覺らずして濫に是非の言をなす、その愚寧ろ笑ふべきなり

⑤日本新聞

○河村氏の絵画 呶々子（明治三十二年三月二十四日付）

一人舞台の展覧会は洋画の方にて河村清雄氏、日本画の方にて橋本雅邦氏、双々相對して一は谷中美術院に一は上野梅川樓に開かれぬ。我雅邦氏のを逸し、独り河村氏を見る

昨日まで罵倒先生の毒舌は頻りに日本画を打撃せしが我は河村氏の絵画を見るにつけても我所謂日本画の上に顧み、口惜けれど彼が罵倒の誠にやみがたきを感じずんばあらじ、さても日本画も運のつきかや、こゝに大才出で、一新するに非ざれば、彼碌々の木葉天狗が為め日本画界はつゝきこわさるべし、笑ふ可きに非ずや、彼等の天狗連が自ら誇つて我画世界に冠たりとし、其為にする所ある洋人等が追従的賛評を得て、小兒らしくも泰西人士亦共に称賛措かずなど独りヨガルと雖も、各国博覧会は未だ一度も、其画を取つて美術館に陳列するを許さざるなり、口を開ければ即ち新機軸と称し何派と叫び、あるは天平の古今宣和の遺韻などと騒ぐだけのことは知れど、天平どころか天麤羅のメツキは忽ち怪物染みたるものとなり、若くはサロンの焼直しに止まるがセイ

くなり、かくして盲人相携へて地図を案じ喧々囂々として進路を探ると雖も、一步進めば馬糞を掴み一足踏み出せばドブ溝にころがり込むが、定まれるの結果なり、何ぞ能く駭々として又進むを得んや、果然新来の洋画は尚年月の甚だ僅少なるにも関らず、却つて長足の進歩を致し、他が盲評定の間に於て終にそを凌駕するの勢を作せり。河村氏の絵画の如き亦明らかに之れを証するもの、み、ア、日本画家たるもの無用の小理屈をならぶるの閑あらば、少しく奮発して其腕を研げ、我は汝等が日本画家の名を冠するを慚づるものなり

故海舟が日本一と称せし賛語は果たして河村氏が技倆に適するや否や、そは未だ直に首肯すること難かるべし、然れども氏が絵画の尚幼稚なる我今の画界に於て、一明星の光彩を放つに足るは疑はざるべし、蓋し我近世の洋画家にして最も早く海外に留学せしものは実に氏ならん、即ち明治五年の頃氏は先づ米国に入つて絵画を修め、後伊太利に転じてベニス派の技倆を研きしなり、氏今や年齢五十有余留学後更に刻苦鍛錬すること二十有余年、伎の進む所漸く之れを日本画の範圍に侵入せしめ、終に今日の如き河村一流独特の新機軸を出すに至れり、其今回出せるもの凡そ百枚許なれど、氏か作は尚此他に於ても、幾多の作品あるべし、思ふに氏が今回の出品は其最も近年の作ならんか、我は之よりも少しく氏の画を云はん

河村一流独特の画風を云ふはベニス派の筆法を以て日本的絵画に化せしめたる点にあり、解剖に明らかに輪廓に精しく、而してパースペクティブを解しモデレーを知れる其画法を倒用して、清酒簡潔なる四条の畧域を侵したるに在り、描く所花鳥を主として器具装束等なるが、其濃厚なる油画を叱呵して、流暢宛として水の如くなる点は実に他の学び得ざるものたり、かくして氏はこの独特の伎を揮ひ、陰影骨格等を初め、由来日本画の欠陥たる諸点を埋めて油絵的日本画を創始し一面に日本画家の求むる所を容る、と共に、一面に西洋画家の求むる所

をも容る、の画風を為せり、但し一言以て氏の画風を評さば、日本画の為さんとする渾てを為し得て更らに西洋画の要求をも充たせる者とも云ふべし、氏が今日に名を擅にするもの実に此技倆あればなり（未完）

○河村氏の絵画（承前）（明治三十二年三月二十五日付）原本には貼付されていないが筆者により補った

氏が独特の此画風は、やがて其材料の使用に於て亦一風の妙伎を有せり、即ち油絵具に、更らに日本画家の使用する金銀箔泥等を混用しつ、能く二者の調和を為さにむるが如きは其一例といふべし

氏が此奇才は独り此類に止まらず、其画板の如きは最も他人と趣を異にし、頗る趣味に富める神代杉を愛用するが如し、其の川田豊造所蔵の秋草の画の如き、神代杉の横板に尾花、龍膽等を油絵具もて描きたるが之れに添へし一輪の半月は銀泥を以てし、其木地は其の木地の儘にして、能く神代杉固有の色を利用しつ、茲に簡淨明鮮なる一画を成就せしめ又西洋風の錯雜模糊の跡無し、而して其愛用する神代杉の画板は、横豎方円或は楕円なるあり或は磬の如きあり、種々多趣多様にして其形の異なるに応じ、其描く所の夫々に適合せるは、画板の形に従つて描くと云はんよりは、寧ろ描く所に従て画板を造れる者にあらずやと疑はしむ、從來我日本画家中にも、時として袋戸等に此種の描写を試みざるに非らずと雖も、其地板の形に考へて之れに調和を需むるが如き手段なく、更らに進むで其地板の形状資料を自由に使役するが如きに至つては、光悦、光琳、是真等を除くの他殆ど之れ有るを知らず、夫の日本画に西洋的額縁を付け、コロンブス博覧会に出品したる諸先生方が滑稽的の考案に比して、実に霄壤の差といふべし

氏が画板には其他に紹塗りの板面を用ひたるあり、沈着にして光彩甚だ賞するに堪へたり、神代杉を平民的と見ればこは貴族的にやあらん、徳川公所蔵の秋草は白菊を中央に、月を上端に描きたるが、此会に於

ては大作の部に入るべし

氏が材料の使用に一種の奇才あると共に又、其題目にも斬新見る可きもの多しとす、同じく是れ雞を描けるにも、欠け椀の覆りたるより糊のこぼれ散りたる、其中に豆粒の混じたるなどのきわどき手腕は、所詮玉章輩の心付く所にあらず、更らに其草花の乱れて其前に横り咲きたるなど趣味津津といふの他なし、又楓葉一枝斜に紺塗りの板面に横はれるを見しが、此画に一羽の雀を付したる手段迄は誰れ人にも為し得可き所なるも、更らに松葉のこぼれ来つて、其枝にかゝれる如き点に至つては、斬新の手ぎわ又尋常画家の思ひ至らざる所なるべし

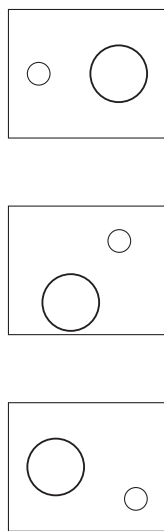
氏が如是の才は何ごとにも気のキゝたる所あり、従つて其画の位置配合など一見巧妙に驚かしむなり、我は今氏が描く所のものを見るに、其手段の頗る慎重熟慮の余に出づるものを認む、其一枝一葉と雖も改竄又改竄、千思万考の後にあらざれば容易に其筆を下さず故に筆一度動けば一点亦過ちなきを致す、出処皆爾かく要領ある所以なり、蓋し匆匆にして氏の画に對せば其快濶流暢の筆は磊落にして毫も苦慮する所なきが如きも、実は決して然るに非らず、其生氣活動は其苦心鍛錬の結果に外ならざるなり、我は氏が性質の磊落に似て却つて小心翼翼たる点を思ひ、其画の亦其性質を現はせるものたるを云はんとす

油絵を以て日本画を為し、和洋の調和を試みし伎倆は所詮氏の功を奪ふ可らず、其画の才氣奔逸して、其資料を駆使する伎倆の自在なる、我亦氏が独特の長伎と為す、我は此諸点よりして氏を賛称すること実に上述の如し、然れども我は之れを以て直に渾べてに向つて氏の画を賛するを得ざるなり、我は一面に氏が長伎あるを認むると共に、一面に於て亦其短所を発見す、我は既に氏の長伎を激賞したり、之れより少しく短所を云はざる可らず

○河村氏の絵画（承前）（明治三十二年三月二十六日付）原本には貼付されて
いないが筆者により補った

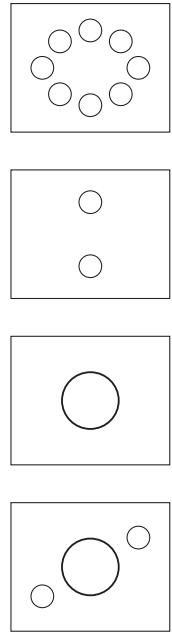
我をして容赦なく云はしむれば、氏が絵画の天地は尚小品物の範圍を脱せざるなり、假令其額面は如何に大なりとも、其の描く所は小品物の範圍を脱せざるなり、之れを風景画の範圍内に於て見るも、單調なる花鳥草木の抽象的一小景に過ぎざるなり、之を日本画界に求むれば、四条派が為す所の者に於て氏の長伎は存するものといふべし、蓋し氏か絵画の極めて気のきゝたる所斬新、流暢、清洒などいふ諸要素は、自ら複雑なる大画を作すに適せざるものが、以是嚴重なる美術上の価値を求むるに至りては、其規模の小と手段の單調とは、大に氏の画に對して重量を減せざるを得ず、我は氏の画を目して我画界の奇才と稱するも、未だ英雄の資格を与へがたし、今回の出品中其花鳥の画が常に巧妙なるに拘はらず、少しく複雑なる風景などの失敗せるは、亦此一現象と為すを得ん

氏が画を見るものは大抵其変化あるを云ひ其斬新なるを云ふ、然り其描く所悉く意匠の一律ならざるは、誠に氏が變化に富む所を証すべし、然れども氏の此變化は亦実に或る圈内に於ける變化にして、大体の上にあらずるなり、今試みに氏が画の位置配合の法を見るも亦此風を知るに足る、即ち



上図の如く常に大なる一団と小なる一団は種々変化ある位置を取れど、其大小対照の手段より見れば、大体に於て毫も変化なきなり、形にあらずんば勢、勢にあらずんば事件、或は梅と月とを以てし、或は幹と枝とを以てし、或は銀色と紺青を以てする等、此間の變化は頗る多しと雖も其対照の手段や即ち一なり、之れを夫の光琳画帖に徴する

に



等大体的変化に至りては、更らに川村氏の比にあらざるが如し、氏が単調にして規模の小なるは、此上にも亦著るしといふべし

我は屢々繰り返してホメちぎり、氏が西画を捉へて日本画を改造し、能く二者を消化調合せしめて一新画を創始したる功を、然れども一面より見れば氏が事業は尚僅に一步にして、単に二者を組合せたるに止まり更らに之れより純然たる一新機軸を案出せりとは云ふべからざるなり、即ち之れを日本画の方面より見る、其霞の如き將た土手の如き未だ光琳の範圍を脱する能はず、又之れを西洋画の方面より見る、未だマ子一乃至ルバージュ等の如く根本的發明を認めざるなり、於是我は云はん、氏の画は東西両画の結婚式を挙げたる迄なりと、未だ此結婚によりて愛児は生れざるなり、されば此愛児が発育して英雄豪傑となるが如きは、尚未來永遠の希望に止まるべきのみ

氏が画は尚如是の程度に在り、然れども氏が兎に角に此結婚式を挙ぐる迄、首尾能く取り運ばしめし伎倆は到底埋没すべきことにあらざるなり、然り若し之れをして、夫の日本画家の所謂新機軸連たらしめば、彼等は未だ結婚に至らずして、先づ見合前に不調の破談となるべきなり、我は唯此上は、河村氏が能く未來に夫の愛児を挙げ、愛児をして更らに偉人たらしむるに至らんことを切望す

終に臨んで尚一言を付す、氏が今回の出品中花鳥は主なる部分なりしが、瀧の画五六葉見えたり、是れが氏好む所のものなるべしと雖も、拙劣殆ど別人の如く悉く取るに足らざるなり、故柴田是真独特の伎倆

を有しながら、亦瀧を好むで之れを描き、而して瀧に限りて皆拙劣の作をなしたり、二者相似たる所寧ろ奇といふべし、然りこは奇癖なるべし(完)

「右日本新聞」

招待状認済扣(資料番号04001509)

○印ハ水野君持参

招待状認済扣

・栗塚省吾氏

使へ・東京美術学校

○
・橋本雅邦氏

右廿六日配達

○郵便
京華日報社

○同
やまと新聞社

上原多吉氏

田野氏持参
苗村又右衛門氏

苗村半次氏

○
中村松太郎氏

沢鑑之丞氏

杉山令吉氏

土屋保氏

森林太郎氏

太田万吉氏

旅行

三輪潤太郎氏

原六郎氏

保利^カ聯氏

○ 下村孝光氏

成瀬隆藏氏

鴨下友次郎氏

細貝為次郎氏

中上川彦次郎氏

木戸小太郎氏

榛原直次郎氏

○ 宮川香山氏

関保之助氏

桜井正次氏

川崎千虎氏

尾形月耕氏

松本楓湖氏

塩田力藏氏

久保田米遷氏

小堀鞆音氏

○ 守田治兵衛氏

高山紀斎氏

○ 盲啞学校

福羽美静氏

戸田氏共氏

落合直文氏

永井素岳氏

長郷泰輔氏

佐田清次氏

阿久津晋氏

山本権兵衛氏

矢田部良吉氏

合田清氏

桂太郎氏

青木周藏

富士見軒

堀田連太郎氏

松平直亮氏

増嶋六一郎氏

野津道貫氏

浅野総一郎氏

星野錫氏

宮下俊吉氏

岸田吟香氏

福地源一郎氏

黒岩周六氏

西園寺公成氏

金清楼氏

青山胤道氏

榎本武揚氏

佐藤三吉氏

皆川四郎氏

八尾新助氏

吾妻健三郎氏

毛利重輔氏

陸 実氏
渡辺儀助氏
木内重四郎氏
中嶋精一氏
野田谿通氏
久我通久氏
竹田秀雄氏
曾根荒助氏
井上角五郎氏
石黒忠恵氏
岩谷松平氏
岩倉具定氏
塚原靖氏
塚原律子氏
杉山仙竹氏
小嶋憲之氏
酒井忠興氏
酒井忠道氏
田川大吉郎氏
都築馨六氏
鳩山和夫氏
伊藤雋吉氏
吉川半七氏
小林義雄氏
松平康民氏
三井三郎助氏
森川弥平氏

穂積陳重氏
益田孝氏
松本莊一郎氏
樺山資紀氏
蜂須賀茂昭氏
春木義彰氏
星亨氏
後藤猛太郎氏
大橋新太郎氏
竹村千佐氏
ブリンクリー氏
高山林次郎氏
フェノロサ氏
本多忠保氏
名村泰蔵氏
三島弥太郎氏
高崎安彦氏
黒田清輝氏
音楽学校
英国公使
米国公使
仏国公使
独乙公使
露国公使
田中熊三郎氏
寺見機一氏
高橋是清氏

大橋豊次郎氏

日高秩父氏

以太利公使氏

清国公使氏

西班牙公使氏

和蘭公使氏

奥国公使氏

メキシコ公使氏

○ 小林習古氏

牛込区津久戸前町拾六番地

、公爵 二条基弘殿

豊多摩郡千駄ヶ谷村五百六拾二番地

、同 徳川家達殿

麹町区七丁目廿番地

、同 近衛篤磨殿

赤坂福吉町二番地

、同 一条実輝殿

北豊島郡巢鴨町一丁目拾七番地

、同 徳川慶喜殿

本郷区向ヶ岡弥生町三番地

、同 浅野長勲殿

麹町区永田町貳丁目一番地

、侯爵 西郷従道殿
同 鍋島直大殿

認済

津田仙氏

尾崎紅葉氏

野口小籟氏

跡見玉枝氏

松平康国氏

依田百川氏

△

安原金次氏

津田梅子氏

龍居頼三氏

大岡育造氏

嶋田三郎氏

高田早苗氏

長与専斎氏

同 称吉氏

渡辺筆子^(子)子

辰巳小二郎氏

長田秋涛氏

賀古鶴所氏

中嶋藤吉氏

(削除)「巖本善治氏」
秀英舎
宮地巖^(子)大氏

全

全

全

全

全

全